

■ 特集 「ICTと人間関係」

コロナ禍のラボラトリー方式の体験学習

2年間のゼミナール活動をふりかえる

中尾陽子

(南山大学経営学部経営学科)

はじめに

2020年初頭より日本国内でも広がりを見せ始めた新型コロナウイルス感染症は、大学教育の現場にも様々な影響をもたらした。2020年4月、筆者が所属する大学では入学式が中止され、学内への入構も制限される事態となった。その後、3週間遅れでようやく開始された授業は、全てオンラインで実施することとなった。この時、筆者の担当授業は5科目あり、そのうちの2科目が講義科目、3科目がラボラトリー方式の体験学習を通して学ぶ演習科目であった。

筆者にとって、オンラインで授業をすること自体が初めての体験であったため、まずはこの変化そのものに対する不安や緊張感が大きくあった。それと同時に、どのようなすればオンラインで体験学習を実施できるのか？ということが、非常に大きな課題となった。

ラボラトリー方式の体験学習とは、「特別に設計された人と人との関わる場において、“今ここ”での参加者の体験を素材（データ）として、人間や人間関係を参加者とファシリテーターとが共に探求する学習（津村，2010；津村，2019）」とされる学習方法である。この“今ここ”での関わりについて、池田・土屋（2021）は、「“今ここ”での関わりが、他者と直接対面し対話する時間と場を意味することは、特に議論されることもなく、自明のものとして考えられてきた。すなわち、ラボラトリー方式の体験学習は対面で行うことが前提であり、その他の可能性を考慮することもなかったと考えられる。(p.153 14-7)」と述べている。確かに、筆者も間違いなく、ラボラトリー方式の体験学習は、人と人との直に対面し、そこで生まれる関わりから学ぶものと思い込んで実践をしてきた。そのため、これまで想定していなかったオンラインという状況で学びの場を創ることに、大きな不安を感じていたと言える。

この全面的なオンラインでの授業スタートが確定した時、筆者の頭に最初に

思い浮かんだのは、3年次生を対象としたゼミナール（以下、ゼミと表記）のことであった。このゼミに参加するのは、2019年の秋、世の中がこのような状況になるとは微塵も思わず、ラボラトリー方式の体験学習を通して人間関係を学ぶこのゼミに関心を持ち、選択してくれメンバー達である。筆者にとってどのクラスのメンバーも大切であることに間違いないが、特にこの方々に対しては、何としてでも、体験を通して人間関係を学ぶ場を提供していきたいと強く思った。

このメンバー達と過ごした2年間をふりかえると、結果として新型コロナウイルス感染症の影響が消えることはなく、常に先の見通せない日々が続いたという感覚を持つ。毎回のゼミのプログラムを考える際も、感染状況がどのように推移し、大学からいつどのような対応を求められるのか予測がつかず、事前に時間をかけて入念な計画・準備をすることが難しいと感じながら過ごしてきた。そのため、例年にも増して、その時々参加者達の思いと状況をしっかり把握しようと努め、今この状況で最善だと思う内容を考え、実行してきたと感じる。

本研究では、まさに『今ここ』に集中しながら過ごしてきたコロナ禍のゼミ2年間を改めてふりかえり、ラボラトリー方式の体験学習がこれまで経験したことのない『オンラインでの関わりを含む体験』が、参加者たちの学びにどのような影響を及ぼしていたのかについて検討していきたい。

目的

本研究では、2020年4月から2年間のゼミ活動を改めてふりかえり、以下の2つの側面について検討していく。

- 1) コロナ禍2年間のゼミにおいて、どのような学びの時を過ごしてきたのかを概観する。特に、オンラインと対面、両方の実施形態を用いてきたコロナ禍のラボラトリー方式の体験学習が、学生のゼミ活動にどのような変化をもたらしたのかについてふりかえていく。
- 2) ゼミの参加者達は、この2年間のゼミのプログラムとゼミメンバーとの関わりを通して、どのような体験をし、どのような気づきや学びが生まれていたのかについて検討する。特に、ラボラトリー方式の体験学習がこれまで経験したことのない『オンラインによる体験学習』や、従来に比べて対面での関わりを大きく制限された中で生まれていた体験、気づきや学び、そしてそこからの新たな試みはどのようなものであったのかについて注目していく。

本研究を通して、コロナ禍におけるラボラトリー方式の体験学習の実践が参加者に与えた影響と、筆者がスタッフとしてこの学びの場をつくるために、参

加者達と共に行ってきた探求について、少しでも明らかにしていきたい。

方法

研究対象：2年間のゼミ実践をふりかえるにあたり、該当期間の授業記録と、ゼミの参加者が毎回のゼミ後に記述したジャーナルおよび春・秋の学期末に記述したレポートの内容を用い、検討を行った。研究対象となる期間は、2020年4月下旬から2022年2月中旬であった。

まず、研究目的1)について検討するために、2年間のゼミにおいて参加者へ配布した資料、課外活動において参加者が作成した記録、筆者の記録、参加者とやりとりしたメール等の内容を用いながらふりかえり、概要を整理した。

次に、研究目的2)を検討するために、ゼミの参加者が毎回のゼミ後に記述したジャーナルおよび春・秋の学期末に記述したレポートの記述内容を全て概観し、日程毎に整理すると共に、明らかな誤字脱字については修正を行った。

ジャーナルは、毎回のゼミ終了直後から3日後までの提出期間を設け、授業支援システム『webclass』を通じて提出することを求めた。記述テーマは、その日の実践内容によって若干異なるものの、その日の自分の体験をふりかえり、その中での気づきや学びと、次回のゼミや日常生活につなげていきたいことなどについて、自由に記述するよう求めるものであった。対象としたジャーナルは、2020年4月28日から2021年11月9日までに実施したゼミ、全50回に対して記述・提出されたものであった。

またレポートは、各年度の春・秋学期末（2020年8月、2021年2月および8月、2022年2月の4回）に記述されたものを対象とした。記述テーマは、こちらも期によって若干異なったが、その期のゼミでの体験とメンバーとの関係をふりかえり、その中での気づき・学び・今後につなげていきたいことなどを自由に記述するよう求めたものであった。なお、2022年2月に提出された最終レポートは、2年間のゼミでの体験全体をふりかえり、記述するよう求めた。これらの提出は、各期の最終ゼミ終了後から2週間程度の期間内に、ジャーナルと同じ授業支援システムを通じてなされた。

これらを研究対象とすることについては、予めゼミ参加者全員に本研究の概要を説明し、同意を得られたメンバー14名分の記述内容をデータとして用いた。

検討方法：研究対象の項に示したデータを、テキストマイニングソフトウェアkh-coderにより分析した結果と、対象者により記述された文章そのものを用いながら検討することとした。

本来、このような研究目的にアプローチするためには、コロナ禍前のデータとの比較検討が必要だと考えられる。しかしながら、コロナ禍前の筆者のゼミでは、紙にジャーナルを記述し、筆者がコメントを記した後に参加者へ返却していたため、データが残っていなかった。また、レポートは電子データで提出

された時期があるものの、一定期間保管した後に処分してきたため、閲覧できない状況であった。そのため、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けた直後の2020年度から当ゼミの活動を体験した参加者の2年間の体験と気づきを丹念に辿ることによって、オンラインおよび従来に比べて対面での関わりを大きく制限された中での体験学習が、参加者に与えた影響について捉えていくこととした。全体を通して、非常に探索的かつ記述的な試みとなり、検討が不十分であることは重々承知しながら、ラボラトリー方式の体験学習がおそらくこれまで経験してこなかった状況での実践記録の意味も含め、取り組むこととした。

実践の結果と考察

1. ゼミの実施形態・ねらい・実施内容

2020年度から2021年度に実施したゼミについて、日程・ねらい・実施内容・実施形態を表1-1から1-5にまとめ、各期の実践概要の欄および文末に示した。

まず、コロナ化によって大きく変化した実施形態についての概要をまとめる。本学では4学期制をとっており、第1クォーター（以下Q1と略記）は4月から6月前半、第2クォーター（以下Q2と略記）は6月後半から7月、第3クォーター（以下Q3と略記）は9月中旬から11月前半、第4クォーター（以下Q4と略記）は11月後半から1月下旬に開講される。2年間の実施形態の大きな流れは、まず、2020年度のQ1・Q2が全てオンライン、続くQ3はオンラインを基本とし、ごく一部で対面授業が可能となった。Q4はオンラインを基本としながら、対面での実施がQ3よりも緩和された。2021年度になると、ゼミを含む少人数の演習科目は、全面的に対面実施となった。この状態は、当ゼミだけではなく、大学全体としての授業開講体制であった。

このように、2020年度は、ゼミの実施形態だけでなく、大学としても2019年度までとは大きく変化した一年となった。以下では、そのような状況の中での当ゼミの実践の概要と参加者の様子を、クォーター毎に記述していく。【参加者の様子】の欄には、筆者の捉えていたことと共に、メンバーのジャーナルの記述内容を引用しながら、その時の様子を示すこととした。これらを記載するにあたり、ジャーナルの記述者や登場人物が特定されないように適宜修正を施した。また、長文の記述も多く提出されていたため、引用では、その全体や文脈を損なわないよう留意しながら適宜抜粋をし、斜字で表記した。

2. 2020年度の実践概要と参加者の様子

2-1. 2020年度 Q1

2020年度4月（Q1開始）の時点では、まだ大学のオンライン授業体制が整っておらず、ゼミのような少人数でも、その使用方法や時間に制限が設けられていた。具体的には、毎回の90分間のゼミで、ビデオをオンにして双方向コミュ

ニケーションの時間をとることは難しかった。そのため、授業冒頭のみオンラインで実施し、その後は通信を切って個人ワーク、それを次回のゼミに持ち寄ってわかちあい、というような進め方をせざるを得ない状況だった。そこで、オンラインでのゼミを実施する際は、参加者同士の関わりを第一に考えながら、プログラムを検討した。

その関わりの際の事前準備ともなる個人ワークは、改めて自分自身の様々な側面に目を向け、気づき、明確化してみることを目指して、言語的・非言語的に表現するものを選んだ。また、この状況にあるからこそ、参加者たちが少しでもポジティブに自分自身や未来に目を向けられることを願い、アプリシアティブ・インクワイアリー (Cooperrider, D.L. & Whitney, D., 2005; Whitney, D. & Trosten-Bloom, A., 2003) の考え方や手法を取り入れたワークも試みた。

また、ゼミの終了後には、その日の気づきや学びをジャーナルとして記述し、大学の授業支援システム webclass を通して提出してもらうこととした。ここに記述された言葉を手がかりに、参加者達の思いや様子を把握し、次のゼミの内容を計画した。

表1-1. 2020年度 Q1ゼミナールの概要

日程	ねらい	実施内容	実施形態
①4/28	<ul style="list-style-type: none"> このゼミのねらいと概要を知り、2年間のゼミ活動をイメージする。 ゼミのメンバーとの顔合わせを通して、今の自分の気持ちに気づく。 	ガイダンス 実習 メンバーとの顔合わせ	オンライン
②5/5	<ul style="list-style-type: none"> このゼミを希望したときの自分の思いを確認する。 自分自身のこころの内側に目を向け、ゆっくり味わい、表現する。 	実習 心の窓（個人ワーク）	オンライン 15分 個人ワーク
③5/12	<ul style="list-style-type: none"> メンバーと共に、お互いの心の窓を広げ合う関わりを試みる。 自分の聴き方や話し方に目を向け、気づく。 	実習 心の窓（わかちあい）	オンライン
④5/19	<ul style="list-style-type: none"> 自分の行動目標をふまえて、ゼミメンバーとの関わりにチャレンジする。 社会人基礎力の観点から自分の強みを分析し、未来の自分を想像しながら今後の行動目標を明確にする。 	実習 私の強み分析（個人ワーク）	オンライン 30分 個人ワーク
⑤5/26	<ul style="list-style-type: none"> 自分の行動目標をふまえて、ゼミメンバーとの関わりにチャレンジする。 社会人基礎力の観点から捉えた自分の強みと今後の行動目標をわかちあい、このゼミの中にある強みを捉える。 	実習 私たちの強み探し	オンライン
⑥6/2	<ul style="list-style-type: none"> 自分の行動目標をふまえて、メンバーとの関わりにチャレンジする。 ゼミメンバーの持つ強みを活かし、自分たちがどのようなゼミを創りあげていきたいか、対話を通して可能性を探り、共通イメージを創り出す。 	実習 ゼミの中にある強みのイメージ わかちあい 実習 理想の私たち	オンライン

【参加者の様子】

筆者にとっては、初めてのオンラインでの体験学習だったため、トラブルなくスムーズに進行できるのか、そこでどのようなプロセスが生まれていくのか全く想像がつかず、大きな不安を感じていた。また、参加者達も筆者と同じようにオンラインでの関わりに不安を抱えているものと想像し、どのようにサポートすればよいだろうか？という不安に苛まれていた。ところが、ジャーナルの記述をみていると、第2回ゼミまではオンラインでの関わりに対する不安が報告されたものの、それ以降はそのような思いの記述はなくなり、関わりを楽しむ様子や、オンラインでのコミュニケーションや関わりに対するそれぞれの工夫や挑戦が記述されていくようになる。また、第1回の時点ですら、ジャーナルには、オンラインでの関わりに対する不安表明に終わらず、前向きな思いを持って取り組む様子が表れていた。

「今日初めて対面式のZoom講義を体験した。開始直後はみんなの姿と自分の姿をお互いに見ることができる状況に緊張した。こういった相手の反応があるからこそその緊張を久しく味わっていなかったので、身が引き締まった。自己紹介が進むにつれて、相づちやチャットといった相手に対する反応をどうすればいいかが分かってきたので、思ったより緊張が解けた温かい雰囲気でのミーティングができたなと思った。」

「私は2年の頃ラボラトリー方式の体験学習を半年間体験した。だからこそ、このゼミは人と直接会って話し合うことによってこそ多くのことを学ぶことができる。そう思っていたため、ゼミが始まる前はどのようにしていけばいいのだろうととても不安だった。そして実際に始めてみると、最初はみんな様子を伺ってばかりという感じに思えた。また、Zoomだとより一層自己開示をするのが難しかった。(中略)やはりZoomでは相手の考えていることが分かりづらかった。しかし、Zoomでは分かりにくい目線、細かな表情、仕草でも人は相手がどのように感じているのか、考えているのかを読み取っているのだと改めて感じる事ができた。これは対面で行っていたら当然のことだと思い、改めて気づかされることはなかなかできなかったと思う。最初は不安だったが、このような形式でも多くのことを学ぶことができるのだと感じた。対面で話すことができるようになったら、相手の目線、表情、仕草に注意して会話してみようと思う。」(4/28 ジャーナルより抜粋)

このような参加者の気持ちの様子を捉えるため、ジャーナル記載文の頻出語も手がかりにしながら検討を行った。2020年度Q1のジャーナル6回分の頻出上位語は、表2に示す通りとなった。この中で肯定的・否定的な気持ちの状態を表していると考えられた6語について、その出現順位と回数を示したものが、

表3である。

表2. 2020年度 Q1 ジャーナルにおける頻出上位語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数			
1	思う	230									
2	自分	188	54	気づく	17	106	画面	9			
3	ゼミ	100		質問							
	話す			発言							
5	人	84		コミュニケーション	16		共有				
6	感じる	71	57	考え			言える				
7	グループ	68		子			参加				
8	目標	64		持つ	15		始まる		8		
9	今回	56		前			取る				
10	活動	53		楽しい			手				
11	強み	50		強い	14	終わる	8				
12	授業	48	62	個人		出る					
13	意見	47		好き		大きい					
	行動			弱み		喋る					
15	考える	46		声		表現					
16	話	43		相槌	分析						
17	今日	37		たくさん	13	話せる		7			
19	メンバー		34	69		機会			いつ		
20	伝える	32		初めて		12			キーワード	8	
	聞く			不安			学ぶ				
22	反応	31		名前			慣れる				
23	時間	30		理想	挙げる						
24	少し	28	75	チャット	形						
	積極			嬉しい	行う						
26	会話	27		具体	11	作る	7				
28	ワーク		26			周り		似る			
29	緊張	25		前回		10		実際	8		
	今			他				深める			
32	雰囲気	23	82	表情				進行			
	意識			違う	全然						
33	オンライン	22		一番	139			入る		7	
	次回			苦手		分かつ					
38	発表	21	88	出す		11		無い			7
	分かる			体験			理解				
42	良い	20		得意			10	立てる			
	それぞれ			決める	コミッティ						
43	言う	19		言葉	10			一緒	7		
	紹介			自身		楽しむ					
47	多い	18		全体		10		活			
	ZOOM			対面			感情				
43	お互い	19		大事			10	環境		7	
	見る			分かれる	顔合わせ						
47	知る	18	96	話し合い	10			興味			7
	伝わる			ペア		工夫					
47	コメント	18		リアクション		10		次			
	改めて			気持ち			上手い				
47	絵	18		個性			10	成長	7		
	最初			始める	増える						
47	出来る	18		先生	10			表す			
	大切			全員		部分					
47	難しい	18		達成		10		理由		7	
				普段			話題				
				力							

表3. 2020年度 Q1 ジャーナルにおける気持ちを表す語の出現順位及び回数

単位：出現順位(出現回数)

語	Q1全体での出現順位	①4/28	②5/5	③5/12	④5/19	⑤5/26	⑥6/2
緊張	29	18(9)	29(4)	40(4)	33(4)	105(1)	52(3)
難しい	47	70(3)	29(4)	40(4)	66(2)	105(1)	38(4)
楽しい	62			24(6)	21(6)	62(2)	
不安	69	16(10)	71(2)	142(1)		105(1)	
嬉しい	75	106(2)	121(1)	142(1)	27(5)	105(1)	52(3)
楽しむ	139			57(3)	44(3)		

Q1 第1回目のゼミでは出現頻度16位（10回出現）だった『不安』は、2回目には71位（2回出現）となり、その後もほとんど記述されなかった。記述内容としては、第1回目にオンラインでの授業、オンラインでの関わりに対する不安感が記述されたが、その後オンラインに関する不安の記述は見られなくなった。肯定的な気持ちの状態を表す『楽しい』『楽しむ』は、第3回から第4回にかけて高い順位で出現し、ジャーナルにはメンバーとのわかちあいを通じた関わりを楽しんだ様子が記述された。『緊張』と『難しい』は、それぞれ記述内容に変化が見られた。『緊張』は、始めのうちは新しいメンバーとの関わりや、自分の考えを話すことに対する緊張が記されていたが、最後は「緊張しなくなった」という内容へと変化していた。『難しい』は、始めのうちはオンラインでのコミュニケーションや話し合いの難しさに関する記述であったが、第4回からは、メンバーの異なる意見をすり合わせることや意思決定の難しさの記述へと変化していった。当時の筆者の心境としては、彼らのオンライン授業への適応の早さに驚くばかりであり、自分の方が気持ちを切り替え、新しい関わりの方相を楽しんでいこうと感じていた。

この時期に行った、オンラインのゼミを安心な場にするための工夫としては、ブレイクアウトルーム機能を使った少人数での話し合いやわかちあいを挙げることができる。これは、第2回のジャーナルに、複数のメンバーから「前はゼミ生全体の前での発言だったが、今回は少人数のグループだったので発言がしやすくなった。落ち着いてできた。」という旨の記述があったためである。第3回からは、従来以上に意識して小グループでの関わりの方を設けるようにしたところ、参加者たちは、自分自身の発言のタイミング、声の出し方、反応の示し方などをこの場を使って様々に試み、また他者の言動も参考にしながら、より有効な関わり方を模索する様子が伝わってきた。このように、メンバーの組み合わせを変えながら少人数での話し合いやわかちあいを重ねた体験は、その時まだ何の有効なモデルも持っていなかった私たちが、力を合わせて、オンラインでの関わり方のベースを探求することにつながっていたと感じる。

2-2. 2020年度 Q2

担当部局のご尽力のおかげでシステムの整備が進み、Q2の開始時には、オンライン授業に関する制限が緩和されてきた。参加者全員で双方向のやりとりをしながら1コマの授業時間を過ごすことのできる環境が徐々に整ったこと、また、参加者・筆者共にZoomの操作やオンラインでのコミュニケーションに少し慣れ、通信トラブルが生じた際にも落ち着いて対応できるようになってきたことから、ラボラトリー方式の体験学習の構成的な実習に取り組むこととした。まずは、例年ゼミで取り組むことの多い実習を検討し、コミュニケーション実習の『話す・きく・みる』（星野、2003の内容を若干改変）と、コンセンサス実習『価値のランキング』（津村・星野、1996の内容を若干改変）に取り組むこととした。これらの実習は、参加者の機器操作に関するスキルに大きく影響されずに実施できること、ラボラトリー方式の体験学習の基本的な枠組みとなる、複数メンバーでの実習体験・ふりかえり・わかちあいを通して学ぶ実習であること、また、オンラインであっても対面時とほぼ同じ手続きで実施できそうであったこと、などの理由から選択した。

また、Q2の終盤は、実習『わたしがこのゼミを通して取り組みたいこと・チャレンジしたいこと・実現したいことは...』を通して、夏休み期間も含め、ゼミのメンバーと今後どのような活動に取り組んでいくかを話し合った。当ゼミでは、これまで課外活動という位置づけで、有志メンバーを募り、自分たちの取り組んでみたいことに挑戦してきた。コロナ禍前から取り組んできたものとしては、こども食堂の企画運営、学部のゼミ選択サポート企画、ゼミ合宿、就職活動関連の取り組みなどがあった。しかし、コロナ禍でこれまでと同じようにはできないであろうことが予測され、前年踏襲になりがちだった課外活動もゼロから見直す機会となった。

表1-2. 2020年度 Q2ゼミナールの概要

日程	ねらい	実施内容	実施形態
①6/9	<ul style="list-style-type: none"> 自分の行動目標をふまえて、メンバーとの関わりにチャレンジする。 ゼミメンバーの持つ強みを活かし、自分たちがどのようなゼミを創りあげていきたいか、対話を通して共通イメージを表現し、伝える。 	実習 理想の私たちの実現に向けて (Vision・Missionの明確化)	オンライン
②6/16	<ul style="list-style-type: none"> 自分の行動目標をふまえて、メンバーとの関わりにチャレンジする。 自分たちが創りあげていきたいゼミの姿をイメージしながら、自分自身がそこへどのようにコミットし、自分の強みを発揮していくのか、具体的な方向性を考える。 仕事をする中で起きているメンバーの具体的な言動に目を向け、捉えることに取り組む。 	前回実習のわかちあい 実習 今、私たちにできることは？	

③6/23	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の行動目標をふまえて、メンバーとの関わりにチャレンジする。 ・自分の話し方や聴き方に気づく。 ・コミュニケーションを観察し、フィードバックするスキルを養う。 	実習 はなす・きく・みる	オンライン
④6/30	同上	実習 はなす・きく・みる	
⑤7/7	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の価値観を明確にし、自己への洞察を深める。 ・一人一人の違いを大切にしたり関わりに取り組む。 	実習 価値のランキング	
⑥7/14	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いのゼミ活動に対する思いを知り合う。 ・これまでの実習体験と自分らしさを意識しながら、丁寧に対話し、一人一人の違いを大切にしながら関わることを試みる。 	実習 わたしがこのゼミを通して取り組みたいこと・チャレンジしたいこと・実現したいことは...①	
⑦7/21	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いのゼミ活動に対する思いを知り合う② ・これまでの実習体験と自分らしさを意識しながら、丁寧に対話し、一人一人の違いを大切にしながら関わることを試みる② 	実習 わたしがこのゼミを通して取り組みたいこと・チャレンジしたいこと・実現したいことは...②	
⑧7/28	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの実習体験と自分らしさを意識しながら、丁寧に対話し、一人一人の違いを大切にしながら関わることを試みる③ ・自分が取り組んでいきたいゼミの活動について、メンバーと共に明確化する。 	実習 わたしがこのゼミを通して取り組みたいこと・チャレンジしたいこと・実現したいことは...③	

【参加者の様子】

ジャーナルの記述内容を見ると、第3回から5回にかけて取り組んだ構造的な実習体験は、参加者達にとってインパクトあるものだったことがうかがわれた。特に、実習『話す・きく・みる』においては、コミュニケーションプロセスの観察とFBを通して、オンラインであってもお互いの気づきを広げあい、日常生活とのつながりを意識する体験につながったと考えられる。

「今回の行動目標は、話す・聞くの立場から自分を客観視して課題を見つけるにしました。話す・聞くは一見簡単そうに見えるのに実際はとても難しく、じっくり見てみると自分の癖や悪いところが浮き彫りになってきて直してあげたらいいなと思いました。(中略)特に相手の話を遮ってしまうのは日常でも当てはまるので日頃から意識したいと思います。自分への観察者からのコメントを聞くと、いつもは自分で気づかないところに気づかされたり、気づきながらも直せていないところがはっきりしました。」

「今回は観察者と話し手を担当した。話し手に関しては、聞き手のAが喋ったことを所々で要約してくれて、喋りながら頭の中で整理出来たのでありがたかった。この2回の活動を通して、聞き手の重要性が理解できた。話を展開したり、話し手が気づかなかったことを問いかけによって気づかせたりなど、かなり重要であると思う。日常生活でも、相談などされ

たときは積極的に今回の授業で学んだ問いかけなどを意識したいと思う。」
(6/30ジャーナル抜粋)

Q2 終盤の実習『わたしがこのゼミを通して取り組みたいこと・チャレンジしたいこと・実現したいことは...』に対しては、構成的な実習での気づきだけでなく、更なるその前の体験と気づきも踏まえ、取り組んでいる様子であった。このことは、毎回のジャーナルの記述だけでは明確に捉えにくいものの、Q2 終了後のレポートの記述内容が参考になった。これらの記述からは、オンラインでの関わり限定される中でも、参加者達が体験学習のサイクルを辿りながら、懸命にお互いの成長に取り組もうとする様子がうかがわれた。

「Q1からの体験を通して、Q2の後半では人の意見を尊重し、自分の意見ははっきり言い、提案をたくさんできるようになった。最近行ったゼミで取り組みたいことの話し合いでは、Zoomでゼミ説明会を行うための日程や、構成を多く提案できた。フィードバックを受け、それを基に目標を決め、体験をしてきた結果が出ているのではないかと思う。」

「ゼミの活動を体験して、自分の話し方や聞き方など人との関わり方に対する捉え方が変わったと感じました。オンライン授業ということでZoomでのゼミ活動だったから工夫する点は多かったです。例えば、自分の感情や思いを話すときジェスチャーを使うと有効になるけど画面越しだとジェスチャーが伝わりにくいし、そもそも画面に映らないということがありました。じゃあ、どうすればいいのか。話し方を変えるべきだと思いました。話すタイミングやスピード、言葉遣い、内容など改善すれば相手に伝わりやすくなると思いました。(中略)メンバーとのアイコンタクトや、タイミングを考えて話す、観察しながら話すことなど、工夫や改善は出来たと思います。この経験は対面のほうが使えるし、そういう意味で、このZoomでの活動は自分にとってプラスになったと思います。」

「Q2が終わって、初めの頃に比べゼミ全体のオンラインコミュニケーションスキルがかなり身についたように感じる。Q1初回の頃に、みんな相づちや聞き方に関する行動目標を立てていたこともあり、今では会話が混線することなく、リラックスしてスムーズに話し合いを進めることが出来るようになったと思う。ただ、ゼミが進むにつれて進行役が固定化されてしまい、意見し会話するメンバーと意見だけ言うメンバーに分かれてしまったように感じる。特に、最後の「今後ゼミで何をするか」の話し合いではそういった場面がみられたので、Q3以降で改善できたらと思う。このゼミはどちらかというと聞き上手で、追加的な意見をするのが得意な人が多いと思うので、最初は進行や仕切りが得意な人が発言する機会を作るようにして、最終的にはメンバー全員が自発的に意見しようという気持

ちを持てるようになればと思う。」

「自分自身そこまでコミュニケーション能力が高くないので、ゼミ開始当初は最低限自分の意見だけは伝えようくらいに思っていた。しかし、実際にメンバーとオンラインでコミュニケーションをしてみて、お互い意見だけ伝えて、無言になってしまうのがとても虚しいと思った。それから、無理やりでも自分から話題を振って会話が続くように頑張ったこともあり、どちらかというと進行役に近い役回りをするようになったのは、自分でも成長できた点かなと思う。(中略) また、進行役をしていく中で、少数派の意見と十分にすり合わせするために、「〇〇さんの意見はこういうことね。なるほど。」と一度要約することで肯定したり、メンバー全員が会話に参加できるような雰囲気づくりや声がけをするように心がけているが、まだ意見をすることに消極的になっているように感じられるので、それを解決できるような進行役としてのスキルを磨いていきたい。」(2020年度春学期末レポート抜粋)

また、Q1とQ2のジャーナルの頻出語を比較すると、コミュニケーションにおいて『話す』ことに意識が向いていた参加者達の中に、『聞く』ことへの意識も大きく高まった様子がうかがわれた。Q1およびQ2のジャーナル頻出語上位20語を表4に示す。Q1とQ2はゼミの実施回数異なり、記述された文章量も異なるため、単純に語の出現回数で比較することはできないが、Q1において20位だった『聞く』が、Q2では5位に変化していることに注目したい。Q2のジャーナルの記述内容を辿ってみると、第3回以降、聞くことに関わる行動目標や気づきの記述が増えていたため、実習『はなす・きく・みる』の影響が示唆される。

なお、実習『わたしがこのゼミを通して取り組みたいこと・チャレンジしたいこと・実現したいことは...』では、人と人との直接的な関わりが極端に制限される中、自分が何をしたいと感じ、それを実現するにはどのような方法があるのかを、メンバーそれぞれが真剣に考え、アイデアを出し合っていた。これまでであれば、親睦を目的に何の苦労もなく実施していた飲み会や合宿はとでもできそうにない状況であったため、メンバーからは、花火やハイキングなど、ソーシャルディスタンスを保ちながらも実際に会って関わるようなアイデアが提案された。この際にオンラインでの親睦は全く検討されない様子を目の当たりにし、彼らが切に望んでいることは、リアルな関わりなのだとということを実感した。

一方で、対面で実施すれば間違いなく密になることが予測される、学部2年生向けのゼミ紹介イベントやこども食堂の夏祭りについては、検討し始めてすぐに、オンライン開催への模索が始まった。その頃はまだ実際にオンラインイベントへ参加した体験がほとんどなく、インターネットを通して把握できる

事例も少なかったことから、彼らにとってはゼロからイメージを膨らませ、それを実行できるまでに落とし込むという、非常に創造的な取り組みとなった。また、これらの広報にSNSを活用することに対して大変積極的なメンバーが多かったことは印象的であった。実際の関わりが制限される中で、彼らにとってSNSを通したコミュニケーションの重みが増している様子がうかがわれた。

表4. Q1・Q2のジャーナル頻出語上位20語

順位	Q1 頻出語 (回数)	順位	Q2 頻出語 (回数)
1	思う (230)	1	思う (244)
2	自分 (188)	2	自分 (169)
3	ゼミ (100)	3	話す (99)
	話す (100)	4	意見 (90)
5	人 (84)	5	聞く (85)
6	感じる (71)	6	人 (77)
7	グループ (68)	7	ゼミ (75)
8	目標 (64)	8	グループ (70)
9	今回 (56)	9	目標 (69)
10	活動 (53)	10	感じる (67)
11	強み (50)		考える (67)
12	授業 (48)	12	今回 (65)
13	意見 (47)	13	相手 (56)
14	行動 (47)	14	話 (55)
15	考える (46)	15	行動 (54)
16	話 (43)	16	活動 (48)
17	今日 (37)	17	メンバー (39)
	相手 (37)		話し合い (39)
19	メンバー (34)	19	伝える (38)
20	伝える (32)	20	観察 (36)
	聞く (32)		決める (36)

「今回は、ゼミを通して挑戦したいことをより具体的に話し合いました。私自身やりたいことがまだ見つけられてはいないけど、グループで話し合って何となくの方向性を決めることができたと思う。それはSNSを利用した情報提供です。今のご時世外の出ることが難しくなり、SNSを見る時間も増えると思います。しかし、この大学はあまりSNSに力を入れていないと考えました。大学のことをより多くの人に知ってもらうためにも、ゼミで一丸となりSNSを活発に動かせたらよいなと思いました。」

「今日のゼミを通してやりたいことについてのグループ活動、わかちあいを通じて、かなり自分の考え方の幅が広がったように感じた。事前に考えてきた自身のアイデアでは、「後輩のサポートに関するイベント」が一番とっかかりやすく、中尾ゼミの誰もがサポートできるイベントだなど思った。例えば、昨年先輩方が行ってくれたゼミ説明会のオンライン版や、

サークル紹介、大学生生活イベント紹介などのオンライン版だ。しかし、分
 かり合いで「SNS発信」というアイデアを聞いて、これならいつ、どこでも、
 だれでも気軽に情報を得ることが出来るのでいいなと思った。もし、SNS
 で発信したものでいいね数など、反響が高いものがあつたら、対面やオン
 ラインでの企画にしていくと、参加者も増えるのではないかと思う。」

「SNSでのやりたいことをメンバーと話している中で自分のやりたいこ
 とを実行するには準備が重要だと感じました。軽くどんな感じかを相談し
 ただけなのに今後壁になる部分や難しいところなどが見えてきたので、今
 後実行していくうえで頑張ろうと思いました。そして自分のやりたいこと
 だからアイデアは出てくるし、経験をもとに活動できると思うので楽しさ
 はあると思いました。この楽しさから充実した活動にしていきたいと思
 います。」(7/14ジャーナル抜粋)

2-3. 2020年度 Q3

Q3の基本的な授業運営方法は、オンラインで継続されることが決まった。
 しかしながら、大学として、長期間登校できていない学生達、特に入学以来全
 く登校できていない1年生に対する対応が必要だと考えられるようになって
 いた。そのため、少人数の演習科目に限り、どうしても対面で実施する必要
 がある場合は申請し、認められれば対面授業を実施できることとなった。ラ
 ボラトリー方式の体験学習を実施する上で、ほんの少し、明るい兆しが見えた時
 期だった。

表1-3. 2020年度 Q3ゼミナールの概要

日程	ねらい	実施内容	実施形態
①9/15	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミのねらいを改めて確認する。 ・ゼミの時間をどのように過ごしていきたいかについて主体的に考え、自分自身のねらいを明確にする。 	実習 心の窓 課外活動の夏休 み活動報告会の 準備	オンライン
②9/22	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションを通して、今の自分たちのグループの進捗状況を言語化し、把握する。 ・このゼミの現状を様々な角度から捉える。 ・フィードバックを通して、お互いのグループの活動を支えることに取り組む。 	課外活動の夏休 み活動報告会	オンライン
③9/29	<ul style="list-style-type: none"> ・自分を、自分らしく伝えることにチャレンジする。 ・このゼミのメンバーと改めて出会い・知り合う。 ・ここまでのゼミでの活動や時間をふりかえり、共に過ごしたい人についてメンバーと探究すると共に、自分自身の取り組みやこれからについて明確化する。 	実習 改めて自己 紹介 実習 新ゼミ生 welcome企画準 備(面接でどん な質問をする か?)	対面

④10/6	<ul style="list-style-type: none"> ・面接者役割を通して、プロセスを意識しながら対話をする体験をし、面接の際に必要なことに気づく。 ・被面接者役割を通して、自分らしさを伝えることに取り組み、それができる場や面接者の関わりに必要なことに気づく。 ・面接場面の観察を通して、そこに起きているプロセスに気づき、実際の面接へ活かす。 	実習 模擬面接	オンライン
⑤10/13 2コマ連続	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちのビジョンとミッションを改めて意識し、地域の中で試みる ・ゼミメンバーとの関わりをじっくりと味わい、楽しみ、メンバーと共にわかちあう。 	実習 おさんぽ	対面（ハイブリッド）
⑥10/20	<ul style="list-style-type: none"> ・面接での体験をメンバーとわかちあい、次のゼミ活動につなげる。 	実習 面接活動をふりかえる	オンライン
⑦10/27	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセスを意識しながら対話し、観察する。 ・対話の中で起こっているプロセスを捉え、記録し、伝えることに取り組む。 	実習 プレPOPO	オンライン
⑧11/10	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセスを意識し観察しながら、グループのメンバーと対話する。 ・対話の中で起こっているプロセスを捉え、記録し、伝えることに取り組む。 ・FBを通じて学び合う関係づくりに取り組む。 	実習 POPO①	オンライン

【参加者の様子】

Q3 開始前、授業の実施形態についてメンバーの希望を尋ねたところ、実際に会ってメンバーと関わりたいという気持ちを感じながらも、登下校の状況も含めて感染リスクを懸念する声が複数寄せられた。このように、感染症への強い不安を感じるメンバーがいる状況を踏まえ、Q3のゼミは8回中2回を対面で、その他の6回をオンラインで実施することとした。

メンバー全員が初めて一堂に会した第3回目（9/29）の様子は、今でも記憶に残っている。教室に集まってきたメンバー達は、始め大変緊張した様子であった。ジャーナルにも、14名中7名が、この日のゼミが緊張から始まったことを記述していた。しかし、全員が一言ずつ、改めて自己紹介をした後、小グループで話し合いを始めると、様子は大きく変化した。実はこの時期、対面授業でディスカッション等をする場合は、向かい合っただけの会話を控えること、またお互いの距離を2m以上空けることを求められていたため、教室の机は動かすことをせず、イスのみ向きを動かし話し合いを始めた。お互いマスクをし、2mもの距離をとって会話するという状況も影響していたこととは思うが、参加者達は話しを始めるとすぐに、どんどん近づいていってしまったのだ。筆者はこのゼミの時間中、何度「距離をとってね。離れてね。」と伝えたことだろうか。そう伝えても、すぐにまた距離を縮め、楽しそうに笑い合っている彼らの様子には、困りながらも、大変心を動かされた。

ジャーナルには、初めての対面ゼミ時の思いや、オンラインでの関わりとの違いについて、以下のような気づきが記述されていた。

「初めてみんなと会ってゼミの活動ができ、とても嬉しかった。最初は、パソコンの画面越しだったら気軽に話せるようになったけど、実際に会ってちゃんと話せるのが少し不安だった。しかし、自己紹介の時、緊張していると言っていた人が多かったので、自分だけじゃないのだと安心した。」

「今回のゼミは対面だったので、90分という時間が本当にあつという間にも感じました。やはりオンラインとは違い、時差もなく表情も直接見られるし、雰囲気なども間近で感じられることができ、新鮮でした。できるのであれば、毎週対面がいいな—と思いました。」

「今回は初めての対面授業で、楽しみだった反面、緊張していました。先生がおっしゃったように、ほぼ初対面みたいなメンバーもいたので、画面越しではない、動くみんなを見てなんだか新鮮な気持ちになりました。対面はZoomと違い、その場の空気感がしっかりわかり、自分の伝えたいこともより明確に伝えられるので、やはり良いな—と思いました。ゼミの面接も、オンラインで行うので、空気感だったり伝わりにくいかなどはありますが、なるべく2年生の子の内面を引き出せるように、質問内容であったり、問いかけ方などについても学びたいな—と思いました。」(9/29ジャーナル抜粋)

またQ3の大きな課外活動として、ゼミ選択をする2年生に向けた学部全体のゼミ紹介イベントと、当ゼミの新しいメンバーを迎えるための説明会や面接を、オンラインで実施した。メンバー達は、ゼミ以外の時間をふんだんに使ってオンラインミーティングやSNSでのコミュニケーションを重ね、実施に向けて取り組んでいった。これらはほぼ全て、筆者の見えないところでメンバー達が主体的に活動し、成し遂げていったことである。その時々々のジャーナルや後のレポートの記述から、メンバーそれぞれが自分の得意とする力を発揮し、この機会に新しい力の獲得に向けてチャレンジをしながら、協力的かつ意欲的に取り組んでいた様子が伝わってきた。前年とは状況が激変した中で、先輩達の前例を踏襲することは無理だと素早く切り替え、直接コミュニケーションができない中でもSNS等を活用し、協力して仕事を成し遂げるメンバー達には脱帽であった。筆者の感覚では、相当に大変な取り組みだったと思うが、体験からの気づきを素早く次へ繋げていったメンバー達の様子がうかがわれた。

「今回はオンラインで面接の練習をした。あらかじめ決めていたことに沿って練習したが、実際にやってみてから初めて気づくことなどもあり、体験・指摘・仮説化・検証のラボラトリー方式の体験学習の学びがここにも活かせる—と思った。全体で通してみても、やはりこのゼミのみんなはコミュニケーション力が高いんだ—と思わされた。特に止まることなくスムーズに進み、改善点なども一人ずつ的確に出してくれていた—のであり

がたかった。いよいよ来週が面接なので、2年生のためになるような面接を出来るよう心掛けていきたいと思う。」(10/6ジャーナル抜粋)

「ゼミ選考全体を振り返って感じたことは、2年生サポートグループ以外の人も積極的に手伝いや企画に取り組んでいたのも、メンバーで協力する楽しさや心強さを改めて実感しました。各自班が決まっているけど隔てなく協力しあれば、よりいい活動になるいろいろな人のためになるので、今後も周りを見て活動して行きたいです。」

「フィードバックの時間では、自分で考えて行動に移したことが相手に伝わっていてとても嬉しかったです。私は2年生サポート班として、一番初めに開催したゼミ説明会では積極的に動けず、Bさんに任せきり、頼りっぱなしでいました。そんな自分が許せなく、今回の採用活動では誰か一人に仕事を任せてしまうことなく、みんなで協力して行いたいと思っていたので、自分から自分にできそうなことはないかと探しました。実際に面接のスケジュール管理を行ったり、自分が悩んだことは同じサポート班の子に相談して悩みの共有をし、以前の説明会の時よりはみんなで乗り越えることができました。自分から力になれることはないか、「任せっぱなしでごめんね」と伝えることでお互い相談しやすくなり、前より協力できたことと実感しました。フィードバックでも、「手伝えることがあったら言ってね」と声をかけてくれたことが助かった、と言ってもらえて、嬉しかったです。みんなが同じ方向、目標に向かって進むには、基本的な情報や悩みなどを共有することが大切だと感じました。」(10/20ジャーナル抜粋)

また、Q3の終わりからQ4初回にかけては、オンラインで実習『POPO』(津村・星野, 1996の内容を若干改変)を実施し、プロセスを捉えFBする力を高めることに取り組んだ。ジャーナルには、オンラインコミュニケーションに関する気づき、そして、オンラインに限らないコミュニケーション全般に関する気づきが多様に記述されていた。オンラインPOPOは、画面を通して得られる情報が対面よりも限られてしまうため、プロセスを捉えることが難しい側面もあったと思われる。しかし、参加者達は集中して取り組み、観察からの気づきを率直かつ丁寧にFBしあった様子が伝わってきた。

「以前からオンラインで話し合いをするときは、発言している人の妨げにならないように声を出さずに反応することを心がけてきた。今では、慣れて無意識にそれをしていたが、Oさんから声を出さずに頷いていることに周りへの配慮を感じたと言ってもらえて、伝わっていて嬉しく感じた。しかし、みんなの積極性に遠慮してしまい、私自身が積極的に発言するところが少なかった。就活のGDなどでは、積極性をアピールする必要がある場面もあると思うので、そのときに積極的なメンバーばかりだった場合

はどのようにしたら良いか考えて行きたいと思った。」(11/10ジャーナル抜粋)

「POPOを通じて、発表者と観察者の両方を担当したが、観察者の方が個人的にはたくさんの発見があった。細かく観察することで議論の展開のされ方や、良い反応の仕方などをゼミメンバーからたくさん学ぶことが出来た。今後議論するときだけでなく、普段の話し合いにも活かしていきたいと思う。」

「前回私が話す役割の時もそうだったが、話し手と観察者の間で考え方、見方が違うことがあったので、面白かった。このことから、自分が思っていることが伝わることもあれば、相手の解釈の仕方によって変わってしまうこともあるので、もし悪い印象で捉えられてしまうと難しいなと感じた。」(11/17ジャーナル抜粋)

このオンラインで実施した実習『POPO』において、参加者達がどのようなグループプロセスを捉えていたのか検討するために、10/27から11/17までの3回分のジャーナルの記述内容と頻出語に注目し、星野(2007)によるグループプロセスの諸要素を参考にしながら検討した。その結果、グループ内のコミュニケーション(特に、話すことに関する側面と、反応の仕方について)、リーダーシップのありよう(特に、自然発生的に生まれた役割分担について)、グループの雰囲気(特に、誰がどのように作っているか)の3つの要素を中心としたプロセスを捉えていたものと考えられた。これらの要素は、津村(2019)によるグループダイナミックスの氷山図のアイデア(図1参照 津村, 2019 p.48より)と照らし合わせると、5段階のうちレベル2に相当する内容だと考えられる。本研究では、対面で実施したPOPOの気づきや学びと比較できるデータを持ちあわせていないため、これがオンラインでのトレーニング特有のものであるのか否かを検討することはできない。しかし、オンラインでのPOPOを通じて、参加者達が比較的捉えやすいレベルのプロセスについては捉えられていたこと、また、そこから気づきや学びを日常へ繋げるような仮設化をしていたことは明らかになったと言えるだろう。

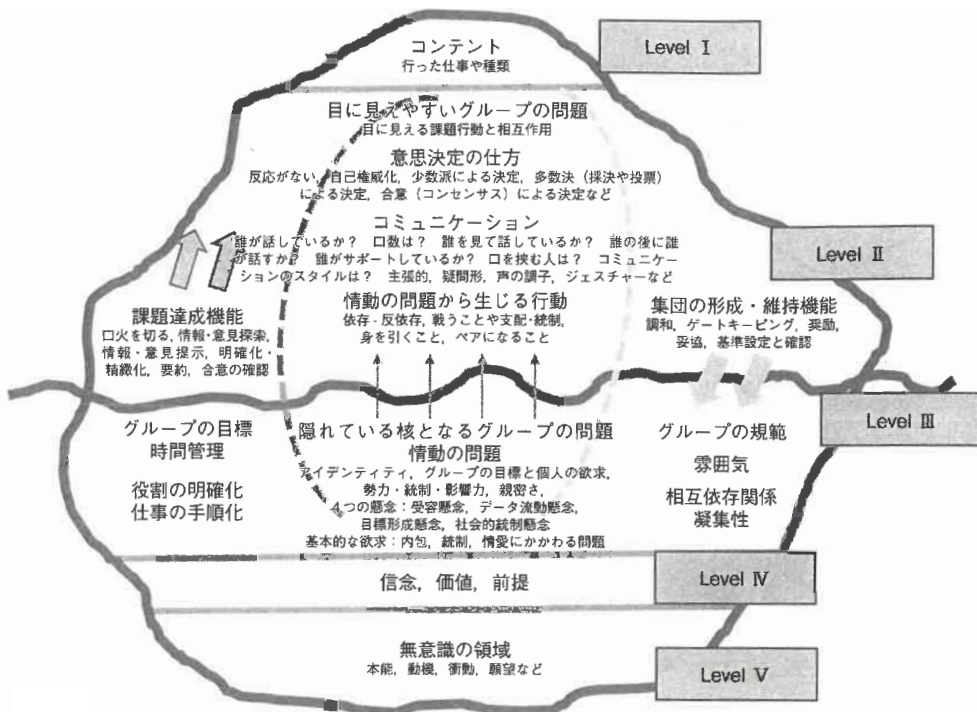


図1 グループダイナミックスの氷山図 (津村, 2019)

2-4. 2020年度 Q4

Q4の基本的な授業の実施形態は、引き続きオンラインとなった。その中で、Q3同様、少人数の演習科目のみ、申請が認められれば対面授業を実施できることにもなっていた。筆者としては、できる限り対面での関わりを増やし、関わるメンバーの幅も広げて、就職活動を間近に控える彼らに、少しでも豊かな人間関係やコミュニケーションの機会を提供したいと考えていた。

表1-4. 2020年度 Q4ゼミナールの概要

日程	ねらい	実施内容	実施形態
①11/17	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセスを意識し観察しながら、グループのメンバーと対話する② ・対話の中で起こっているプロセスを捉え、記録し、伝えることに取り組む② ・FBを通じて学び合う関係づくりに取り組む② 	実習 POPO②	オンライン
②③ 11/24 2コマ連続	<ul style="list-style-type: none"> ・改めて、このゼミのメンバーと丁寧に向き合う。 ・メンバー一人ひとりとより深く知り合うことを目指し、日常よりも丁寧に尋ね、丁寧に考え、丁寧に反応し、聴き合うことにチャレンジする。 ・パートナーとの関わりの中で、積極的な自己開示を試みる(特に、自分の気持ちについて)。 ・パートナーとの関わりの中で起きているプロセスを丁寧に捉え、できる限り多くの気づきをフィードバックする。 	実習 出合いのこころみ	対面 (ハイブリッド)

④12/1 2コマ連続	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーで力を合わせ、よりよく・深く・楽しく知り合うことにチャレンジする。 ・チャレンジを通しての気づきを捉え、伝え合い、お互いの成長につなげることに取り組む。 	実習 クイズ and more大会 * 3・4年生合同授業	対面 (ハイブリッド)
⑤12/8	<ul style="list-style-type: none"> ・課題活動の取り組みをメンバーとわかちあい、フィードバックを通して学び合う。 	実習 フェルミ推定	オンライン
⑥12/22	<ul style="list-style-type: none"> ・フィードバックを通じて、自己理解と他者理解を深めると共に、自分から見た自分と他者から見た自分について、より深く検討する。 ・データに基づいた、丁寧なフィードバックを試みる。 ・改めて、自分の強みを明確化し、言語化する。 	実習 四面鏡	対面 (ハイブリッド)
⑦1/12 2コマ連続	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の体験や思いをわかちあい、これから始まる3年生メンバーの活動をサポートする。 ・共に学ぶ時間から生まれた気づきを伝え合い、自己開示とFBを通してお互いの成長に取り組む。 	実習 卒業研究って？ 実習 八ヶ岳小学校 * 3・4年生合同授業	対面 (ハイブリッド)
⑧1/19	<ul style="list-style-type: none"> ・わかちあいを通してゼミメンバーの関心を知り、自分の関心との接点を見出したり、知らなかった領域への関心を広げる。 ・メンバーとの接点を見い出しながら、卒業研究のグループづくりを試みる。 	実習 卒業研究に向けて	オンライン

【参加者の様子】

ゼミの実施形態についてメンバーの希望を確認すると、登校への不安が強いメンバーと、できるだけ対面授業を増やして欲しいというメンバーの差が大きくなっていった。そのため、対面とオンラインは半分ずつの回数で実施することとし、対面開催の日は、2コマ連続での実施や、4年生との合同ゼミを開催するなど、数少ない登校機会をできるだけ有効活用できるよう工夫した。

第2回で取り組んだ実習『出会いのこころみ』（津村・星野、1996をもとに質問内容等を改変）は、準備された冊子の質問項目に沿って、ペアでじっくりと対話をするものであるが、メンバー同士がより深く知り合うために非常に有効だった様子である。ジャーナルには、半数のメンバーから、「他の人ともやりたい」「メンバー全員とやりたい」という旨が記述されていたことから、ここまでオンラインを中心に関わってきたメンバーへの興味関心を更に高めるといふ面でも、非常に有効であったと考えられた。

「このゼミで活動して半年以上経ちますが、互いのことをほとんど知らないのはとても残念だと思っていました。しかし、本日の授業でじっくり話すことが出来て、とても新鮮で充実した時間を過ごすことが出来ました。（中略）質問に対して出来るだけ詳しく答えることを意識しました。言いづらいこともありましたが、包み隠さず話すことで、自分のことを少しで

も知ってもらえたかと思います。今後も対面授業を通して、ゼミのメンバーとの関わりを積極的に取りたいと思います。」

「ゼミで付き合い始めた仲だからこそ、小学校来の友人たちには絶対に話したことがないことを、逆に話すことができることもあるのだなということに気づき、今後何かあったら相談しようかなと思った。グループワーク、特にオンラインではなかなか今日のように深掘した対話をするのができないので、大変貴重な機会となった。」

「こんなにも相手が自己開示してくれると嬉しいものなのだと感じた。今後、ゼミのメンバーや初対面の人と関わる時には自己開示を意識的に行っていきたい。また、ゼミメンバー全員と対話をしてみたいと思った。」
(11/24ジャーナル抜粋)

2学年での合同ゼミは、人と関わる機会が減ってしまった状況の中、彼らの関わりを幅を広げる機会となった様子がうかがわれた。異学年メンバーと関わる体験を通して、メンバー達は、コミュニケーション力や人と関わる力が随分異なっていると感じた様子であった。また、就職活動や卒業研究という、3年生にとっての目下の関心事について質問し、生の声を聞けることも有効だったようである。ジャーナルでの反応を読み、授業に限らず、部活動・サークル活動、インターンシップなど、多様な人と直接関わる機会がことごとく失われている今、せめてゼミ内では、今後もできるだけ関わるの機会を作りたいと考えた。

「このゼミに入る前から、先輩方の仲の良さや盛り上げ上手なことを知っていたけど、今回の合同ゼミで、改めて感じた。今年は合宿がなく残念に思っていたけど、こういう機会に楽しく関わることができ嬉しかったと同時に、私たち3年生も先輩たちのように後輩と関わる時は盛り上げてその場の雰囲気作りをできるようにしていきたいなと思った。」

「今回はふがいないことに四年生の方に会話を引っ張ってもらってしまいました。C先輩と同じグループになった時はC先輩が僕やDさんに自己紹介で話したことについて聞いてきてくれて、会話のきっかけをくれました。自己紹介の話全員分覚えていて、その人に会った会話を提供することって、単純だけど大事なんだと気づきました。これからは、自己紹介から会話を広げることをしていきたい。」(12/1ジャーナル抜粋)

「先輩から就活の話聞くことができ、卒論についてはもちろんのこと、様々な話を聞くことができ、充実した時間を過ごすことができたと思う。先輩たちと合同ゼミをすると、皆さんグループワークやグループで話すときの自分の役割を認識して円滑に話せるように行動しているのかなと毎回感じる。」(1/12ジャーナル抜粋)

また大学として、わずかなであっても体調不良の際は、対面授業参加を控えるよう推奨していたため、ゼミへの参加機会ができるだけ失われることがないよう、事前に申告があればオンラインでの参加も可とした。このようなハイブリッドでの開催は、オンライン・対面参加者双方がコミュニケーションのとりにくさを感じるようになるものの、メンバー達はその大変さの中からも気づきを得ている様子であった。

「問題解決の実習をしました。私はオンラインでの参加だったので、この実習は少し難しさを感じました。対面とは違い、情報を共有してもメモをするのは個人になってしまうため、そのメモに個人差が生まれ、間違った情報を書いていたとしても指摘できなく、そのまま話し合いが進んでしまいます。そのため、オンラインチームは対面チームとは違い、正解にたどり着くまでに時間がかかりました。」(1/12ジャーナル抜粋)

2-5. コロナ禍のゼミで変化したこと

ここまで、2020年度のオンラインを中心に実施したゼミの実践と、そこでの参加者の様子をふりかえってきた。この後に続いた2021年度のゼミ実施形態は、大学の方針により完全に対面形式に戻ったものの、コロナ禍は依然として続き、実施の中での制約も様々に続いた。またメンバーの状態も例年とは異なるという感覚を持ちながら取り組んできた。そこでここからは、ゼミが対面実施に戻った2021年度も含めた2年間全体に起きていた変化とその影響に目を向けながら、ふりかえっていきたい。

2-5-1. 授業としてのゼミにおける関わり

2-1から2-4で示したように、コロナ禍によって大学の授業形態は大きく変化し、少人数で実施するゼミのような授業でも、2020年度4月から7月までは完全にオンライン、その後は申請により認められた日程のみ対面開催可となった。また、2020年度のQ1は授業回数が減ってしまった上に、オンラインであっても、実施時間や回数が制限されていた。メンバー同士が、オンライン上で顔を合わせてゼミの時間全体を過ごすことができるようになったのは5月終盤であり、従来と比較すれば2カ月近い時間が奪われてしまったとも言える。ただ、2-1の参加者の様子で示したように、メンバー達は初回のゼミから、オンラインでの関わり・学びを前向きに捉え、取り組もうとする様子が見られていた。オンラインのコミュニケーションは伝えにくく伝わりにくいというフラストレーションを感じながらも、よりわかりあえるよう様々な試みをし、お互いの関係を創る工夫をしていたと言える。また対面でのゼミも、2020年9月の時点では、向かい合って話すことを禁じられ、座席間隔も2m空ける必要があったため、不自然な座り方で3人グループを作るのが精一杯だった。現在も、机を

動かすことは禁止、密を避けるためにできるだけ距離をとることを推奨されているため、グループワークは不自然な形態で実施するしかない状況が続いている。

このような一年を過ごし、2021年度のゼミは全面的に対面実施可能となったのだが、それを全面的に喜んだのは筆者を含めて少数だったのかもしれない。2020年度の体験から、オンラインでも授業単位は十分に修得できること、また、人との関係もある程度作れるということを知ってしまった彼らからは、「登校するのは面倒だ」という声も聞かれるようになった。特に遠方から通学するメンバーにとっては、2020年度にはほとんど発生しなかった交通費に対する負担感が大きくなっている様子もうかがわれた。また、オンライン授業を体験したこのメンバーならではと言える興味深い動きもあった。毎年、4年生の年度始めから夏休み前までは就職活動の時期と重なるため、ゼミも欠席者が多くなる。そのような中で、「大学までは来られないけれど、オンラインであればゼミに参加できる」という声があがった。筆者はそこまで考えが至っていなかったが、欠席よりもオンラインで参加してもらう方がよいと前向きに捉え、状況に応じてハイブリッドでゼミを開催していった。

このように、2年間のゼミ時間内だけでも、オンライン、対面、ハイブリッドという3種類の関わりを体験し、その中で起こるいくつかの特徴に気づくことができたと感じる。まず、ハイブリッドを含むオンラインの関わりでは、画面を通して人と対することになるため、お互いの顔と声の情報を中心とした、対面よりも少ない情報でコミュニケーションする必要がある。グループでの対話も、平面上に並んだメンバーの画面を見ながら話すことになり、それぞれがとっている姿勢や体の向きなどから感じられる『場の雰囲気』や『空気感』と呼ばれるものを感じ取ることが極めて難しいと感じた。メンバー達はこのような変化に対し、2-1・2-2の項で紹介したように、より相手にわかりやすい言動を工夫し、試みることを通して、よりよいオンライン・コミュニケーションのあり方を模索し、その力をつけていった様子がうかがわれる。

「この最終レポートを書くにあたって、今までの自分のジャーナルや期末レポートを読み返してみたのですが、印象的だったのがやはりオンラインでのコミュニケーションについてでした。昨年度は一年間、全ての授業がオンラインで行われ、学び方も違えば、学ぶことも変わりました。ゼミでは、グループワークや二年生への面接などをオンラインで行うことで、オンラインコミュニケーションの有効な方法を学ぶことができ、それらは就職活動でのグループワークや面接で活用することができました。今後も、インターネットを利用したコミュニケーションや活動の形態は、コロナが落ち着いても社会に根付いていくと思います。中尾ゼミで学んだことを存分に活かしていきたいです。」

ただ、それぞれの通信環境の影響で通信が途絶えてしまうこともあり、対面時にはあまり起こらなかった、急にメンバーがその場からいなくなるという状況も珍しくないことであった。また、本ゼミでのハイブリッドの状況は、対面で参加しているメンバーが大半の中にオンライン参加者がほんの少数というケースばかりだったこともあり、オンライン側のメンバーがコミットしにくい状態になりがちだったとも感じている。これらの状況は、メンバーの気持ちの中に、「まあ、仕方ない」という思いと関わりを生み出していたように感じた。この「まあ、仕方ない」は、「世の中、色々なことが起こるよね。それもOK!」というような寛容な関わりにつながっていった側面と、「自分（あるいは、誰々）はいなくても大した影響ないよね。」というような若干の諦めに似た状態につながる、異なる方向性があったと感じている。

対面時のコミュニケーションも、コロナ禍前とは随分変化したと感じているが、やはり他者と場を共にする際にマスクが必須となったことの影響は大きいだろう。マスクを使うことにより、コミュニケーションの際に利用できる情報は確実に低下したと言えよう。まず、相手の顔の下半分の表情が見えないことで、相手の感情を読み取りにくくなった。そのため、参加者達がコミュニケーションの中で、「相手は本当のところ、どのように感じているのだろうか?」という不安を感じる場面が増えていた可能性は高いだろう。また、マスクを通しての会話は、声の聞き取りにくさにもつながっている。早口や声の小さい人の話は、従来以上に聞き取りにくくなっているが、まだ関わりの浅い人に対して何回も聞き返すことには、やはり勇気が必要となり、流されていくものが増えている。

オンライン・対面共に、これら一つひとつは小さな引っかけりかもしれない。しかし、このような体験が日々の中でじわじわと増え、積み重なっていけば、ネガティブな気持ちが高まっていく可能性もある。それによって、相手との距離を置いたり、相手への理解を諦めてしまう体験が増えている可能性はあるだろう。幸い、本研究で得られたデータにはそのような方向性の記述は見られず、むしろ、相手にわかりやすく伝えることを意識し、通常より表情を大きく作ったり、声を張ってのコミュニケーションに取り組む様子が見られた。しかし、その行動が心身の疲労につながっていく様子もうかがわれたため、コロナ禍によって生じたコミュニケーションの変化は、残念ながら私たちの負担を増やすものになっている可能性が高いものと考えられる。

さて、このようなラボラトリー方式の体験学習におけるオンラインでの関わり、そしてその後対面が再開してから物理的な距離を大きくとっての関わりは、私たちの関係にどのような影響を与えたのだろうか。心理学の古典的な研究でも、お互いの距離の近さ（近接性）や接触回数が親密性に影響を及ぼすことは知られている。そのため、これまでとは大きく異なる2年間を過ごしたこ

の学年は、お互いに対して従来と同じような親密感を感じることは難しい可能性もあると推察された。参加者の最終レポートには、そのような可能性を示唆する記述が見られた。

「ゼミメンバー全体については、「つかず、はなれず」の距離感で過ごせたなあと思いました。コロナという特殊な状況下もあり、合宿や対面で行われるはずのたくさんの実習が失われてしまい、結構ガッカリすることはありましたが、最終的にはつかず、はなれずではありますが大人な良い関係性が築くことが出来たのではないかと考えています。特に、卒論メンバーの皆とは他のメンバーよりプライベートなお話が出来た関係性になることが出来、一緒に活動出来て良かったと心の底から思えました。最後の最後まで皆で集まって遊んだりすることが出来なかったことが心残りではありますが、コロナが収まり、もう少し歳をとった頃に集まることが出来たらと思っています。」

また、オンラインにおいて、自分らしく関わることや自己開示の難しさを示唆する記述も見られた。

「ゼミでの2年間は常に不安が付き纏う中での活動でした。最初から最後までコロナに振り回されながらの活動で、特に3年生はほとんどオンラインでの授業が続きました。ゼミに入った当初、人見知りの私は本当にオンライン授業という状況の中で、みんなと仲良くなれるのかという不安ばかりでした。実際、ゼミが始まって最初の半年近くはゼミ自体の雰囲気も今に比べるとだいぶ硬かったように思いますし、私自身もグループワークの時間もみんなの意見を頷いて聞くばかりで、中々自分の意見を口に出すことができませんでした。3年の秋になってからは、このままでは全くみんなと仲良くなれずにゼミが終わってしまう気配を感じ、少しずつ自分の意見を出していきましたが、3年の終わりに行った四面鏡でのみんなからの私の評価は「落ち着いている」の評価がほとんどで、コメントも「いつも静かで聞き手に回っているイメージ」といった内容が大半でした。それを聞き、普段私の友達から指摘される私のイメージとは全くかけ離れていることから、私は3年生のゼミで、自分の本来の姿を晒け出すことが全くできていなかったんだと反省しました。この反省を踏まえ、4年生のゼミはもっと自分本来の姿を見せていこうと決めて始まった1年間でした。それでも最初の3ヶ月は、就職活動などでなかなか対面で参加することができず、もどかしい思いを抱えていましたが、徐々に登校できるようになり、みんなと直接接するようになって自分の本来の姿を出せるようになりました。実際、先日行った四面鏡では、3年生の時にはなかった「ユニークな」

という評価が数多くついており、自分自身その変化に驚いたと同時に、自分が変化できていると実感できたことがとても嬉しかったです。」

一方で、以下のような思いや気づきは、このような制限された状況の中だからこそその気づきであり、ラボラトリー方式の体験学習において重要視される『プロセスを捉える力』が高められた実感を示すものであると考えられるため、大いに注目していきたい。

「コロナ禍という大変な状況であったが、他のゼミよりも「人と接する」ということは圧倒的に経験できたと思うし、何より充実した日々を送れたことは間違いないと思う。卒論研究もかなり大変だったが、チームで動くこととはどういうことか、どう仕事していけば良いのかということを出る前に肌で感じられたことは今後必ず生きてくると思う。何より、ゼミ活動を通してコミュニケーションの楽しさ・面白さを再確認し、より多くのことを知れたことが一番の学びであると思う。今後もこの2年間で学んだことを生かし、人と接することの楽しさを感じながら過ごしていきたいと思う。」

「私がこの2年間で学んだこと・成長したことは、「場の状態を把握すること」が上手くなったことだと思います。「場の状態を把握する」というのは、どんなグループプロセスが起きているのかを知ることです。私は意識的にそうすることができるようになってきたし、特に意識していなくても、メンバーの行動などの何かを感じ取って場の状態を把握することに敏感になっていると思います。表情からわかる気持ちや、「今この場は3人が議論してて1人が静観してる状態か」や「この人の今の行動が場を動かしたぞ!」といったことによく気が付くようになった気がします。日常の中でも、グループプロセスというテーマを持って振り返ってみるのはとても有効だなと感じています。「グループプロセスを作っているのは自分たち自身だ」と考えると、「つまり自分たちの望むほうにも変えていける」と思えます。コントロールできるものだと思うといろんなアイデアが出てきて、一人反省会もはかどります。反省を活かして良いグループプロセスを作り出す力を養って、今後の組織活動をもっと満足できるものにしていきたいと思います。」

2-5-2. オンライン実施時のスタッフの関わり方

オンラインでゼミを実施してみて、筆者が最も困り不安だったことは、参加者の様子を捉えにくくなったことだった。オンラインのゼミでは、初期のジャーナルを通して伝えられた「全員だと話しにくい」という声を踏まえ、2から4名のできるだけ少人数のグループにわけ、適宜メンバーを入れ替え、参

加者たちが安心して参加できる場を作るよう心がけていた。今ふりかえってみると、これはメンバー同士の関わりを促進するために不可欠なことだったと感じるし、Zoomのブレイクアウトルームの機能を使えば簡単に実施できたため、大変助かった。ただ、メンバーがブレイクアウトルームにわかれるということは、各グループが個室のドアをピッタリ閉めて活動しているようなもので、筆者はそれぞれのルームに入らなければ様子を捉えることができないという問題も生まれた。従来であれば、各グループから少し離れたところで全体を観ている、何か気になることなどがあれば近づいていき、必要に応じて支援ができたが、オンラインでは、筆者がブレイクアウトルームを順番に回るしかない状況となった。

しかし、実際に筆者がブレイクアウトルームに入っていくと、いくら予めアナウンスをしてあっても、グループの動きに何らかの（ほとんどの場合は、促進よりは抑制方向だと感じられる）影響が起きると感じた。また、話し合いの途中でルームへ入っていくと、グループの前後の文脈がわからないため、状況の把握に時間がかかってしまう。更には、参加者の通信環境や天候の影響で通信が途切れ、Zoomから落ちてしまうメンバーが毎回一定程度生じていたため、その対応も必要になっていた。特にオンラインでのゼミを始めた頃は、落ちたメンバーも筆者もそれぞれ焦ってしまい、対応をしている間にグループワークの時間が終わり、様子を見るどころではない場合も多かった。これらの体験から、ブレイクアウトルームの巡回は却ってメンバー同士の学びの場を妨げてしまう可能性も感じたため、「必要な時はいつでも呼んでください」と伝え、筆者はメインルームでメンバーの帰りを待つことが多くなった。ある意味、メンバーを信じる力を試されているとも感じつつ、メンバー同士で豊かな関わりの時を創っている様子をイメージしながら待っていた。

この際、メンバー達の“今ここ”を知るために役に立ったのは、ブレイクアウトルームから戻ってきた時の表情だったと感じる。更に、筆者だけでなく、各ルームの様子は、別のグループメンバーには全くわからない状況となるため、グループワークの後には、チャット機能を使った全体でのわかちあいも積極的に行うようにした。また、ゼミの後に提出されるジャーナルは、参加者の様子を知る上で非常に重要な情報だと感じていたため、例年以上に、できるだけ詳しく記述してもらうようお願いしていた。

このような体験を通して、オンラインでの体験学習は、対面時以上にメンバーを信じる力が大切になると感じている。筆者の場合、数回のゼミを実施した時点で、彼らへの信頼感がしっかりと生まれていたことが何より幸いだった。もし、参加意欲や学習意欲が高くないメンバーが多いと感じた場合に、今回と同じように関わる事ができたかといえば、正直なところ自信がない。このことから、オンラインでの体験学習を実施する際は、ファシリテーターが参加者と共にいられる範囲が対面よりも狭まるという意識を持ちながら、参加者数やブ

プログラムを予め検討する必要もあると考える。広く一般の社会人を対象とした学びの場では、どのような参加者が集まるのか予想がつきにくい場合も多いため、安全な学びの場をつくるための慎重な検討が必要であろう。

2-5-3. 授業時間外での関わり

当ゼミのメンバーの関わりは、授業としてのゼミの時間のみで創られるものではなく、学内・学外での多様な機会が積み重なって創られてきたと感じている。ここでは、コロナ禍前にはできていたが、2020年度以降は難しくなった機会に目を向けてみる。

2-5-3-1. 日々の学校生活での機会

雑談の時間

オンラインでゼミを実施することによって、ゼミの前後の時間で生まれていたちょっとした関わりが、圧倒的に失われていたと感じる。ゼミ用のZoomのミーティングルームは、時間に余裕をもって開けておくようにしてはいたが、開始時間ギリギリに入室あるいは入室後カメラオフの状態にし、ゼミが終われば即退出、というメンバーが圧倒的に多かった。メンバー達が安心して雑談できるようになったのは、4年次生となって対面ゼミが標準になってからかもしれない。

2020年Q1を終えた時点で、オンラインではこのような余白の時間を活用しにくいことに気づいたため、Q2以降は、ゼミの時間内でこれまでよりもゆっくり話ができるような時間設定にすることを心がけた。実習の説明の際、メンバーへは「その日のテーマに沿った話し合いをし、もし時間に余裕があれば自由に話を広げてください。」という伝え方をしていたが、筆者としては雑談もしてお互いが知り合うことに繋がればいいと肚を括っていた。このことの影響について明確な記述は見られなかったが、やはり対面の場とは全く違うものであったことを示唆する、以下のような記述が見られた。そのためオンラインで参加者同士の関わりを促進するには、より積極的に関係をつくるための場づくりをしていくことが大切になると思われる。

「4年生になり対面授業が原則となってからは、他のメンバーと雑談をする機会も増え、心理的な距離が一気に縮まりました。他のメンバーと関わる機会が増えていく中で、相手の話に興味を持って聞く事、またリアクションを大きくとって興味があることを相手にわかってもらおう事など、自分なりの人との関わり方が構築されてきたと感じています。」

ゼミ室の利用

本学では各ゼミにゼミ室が準備されており、一定のルールのもとで自由に利

用することができる。当ゼミの2019年度までの利用状況としては、主に3年生が課外活動の準備や打ち合わせに、4年生が卒業研究のグループ活動にと、日々活発に利用されていた。ゼミ室へ行けば誰かがいて、ゼミの課題に取り組みながら雑談もする、というこの場合は、同学年同士の横のつながりづくりに役立っていた。また、3年生は課外活動で知りたいことなどがあれば先輩に尋ねることが容易にできたため、縦のつながりづくりにも大いに役立つ場であったと感じている。更に、4年生がグループメンバーと共に卒業研究に取り組む様子から、3年生達は卒業研究の大変さと共に、グループで研究に取り組む楽しい雰囲気も感じとっていたように思われる。

しかし、2020年度のQ1・Q2は、学内への入構すら制限されていたため、ゼミ室は使用禁止。2020年Q3から教員立ち合いの元で使用可となり、2021年Q2から、ようやく学生のみでの使用が可とされた。とは言え、使用時間・入室できる人数・座席の距離・会話や飲食などに関する厳しい制限が設けられていたため、2020年度、当メンバー達はゼミ室での関わりを全く経験していなかった。彼らが3年生のQ4時点で、例年よりも卒業研究に対するイメージが持っていない様子だったことには、このゼミ室での関わりが持てなかったことも影響していたと考えられる。そのため、少しでもこの穴を埋めるために、2020年Q4に2学年合同ゼミを開催し、卒業研究について対話する機会を設けた。4年生メンバーにとっては、卒業研究活動で感じた様々な思いを発散する機会になると共に、3年生にとっては、この時期に感じがちな卒業研究への不安を減らす機会になっていたようである。

この体験は、筆者にとって、日々にあるささやかな関わり積み重ねの大きさを実感し、このような場の維持と活性化の重要性を再認識する機会となった。

学部メンバーとの連携および支援

当ゼミでは、コロナ禍前から、2年次生がゼミ選択前に各ゼミの様子を知る機会（ゼミ紹介イベント）を企画・提供していた。また、当ゼミについての説明会と面接（採用活動）も、ゼミメンバーが主となり実施してきた。コロナ禍前は当たり前のように対面で実施してきたこれらの機会も、2020年度からはオンラインでしか開催できない状況であった。これらは必ずしも必須の取り組みではないので、実施しないという選択肢もあったのだが、メンバー達は「こんな時だからこそ、2年生達にできるだけ多くの情報を提供し、悔いのないゼミ選択をしてほしい」という思いでまとめ、オンラインを活用した企画を行った。これらは10月中旬から11月上旬にかけて実施する内容であるが、有志メンバーでの検討は夏休みから始まり、筆者は知らないところで主体的に他ゼミメンバーとの連携を進め、気づいた時にはInstagramに素敵なゼミ紹介が順次掲載されていた。

また、2020年度Q4には、時間割の関係でオンライン授業ばかりとなってし

まい、登校機会がほとんど得られていない1年生をサポートする企画を、学部と連携して実施することとなった。当日の1年生参加者達は、お互いに全く知り合えてない状態であると予想され、感染対策と楽しい交流を両立できるような企画を創ることは容易ではなかったと思うが、屋外での活動をふんだんに取り入れた企画を実行した。当日は、大学への登校を喜び、実習を通して楽しそうに笑い合う1年生の様子に触れることで、自分達が役に立てた感覚と大きな喜びを感じている様子であった。

実際に人と人が会いにくい状況が続く中、オンライン・コミュニケーションのツールを活用しながら、ゼミ外の方々ともコミュニケーションをとり、メンバー達と試行錯誤した体験は、それぞれの気づきや学び、そして達成感にもつながっていた様子がうかがわれる。

「後輩サポート班の採用活動においては、メンバーと卒論を作り上げるくらい協力して密に関わり合うことが出来ました。誰か一人に負担がかからないようにすることを一番意識して行っていました。率先して役割分担をすることができ、「あの時は本当に助かった」と言ってもらえ、嬉しかったです。今の3年生を見ても仲が良く、個性もあり、いい子たちばかりだったので、後輩サポート班として本当に採用活動を頑張った良かったなと合同ゼミや、卒論発表会を通して思いました。」

「こども食堂と1年生サポート企画は人生におけるターニングポイントだと思っています。どちらの企画もなかなか上手くいかず、頓挫してしまっていたのですが、自分が主軸の一員となって1つのイベントを作り上げる経験は、大学生活の中で得たものでもトップに入るものでした。この活動は、何度も記述している「調整役」を自分の中で確かなものとするきっかけになったものであり、就職活動における最大の武器でもあったので、「先輩から良いものを引き継がせてもらった」とありがたく思うと共に、後輩にとって良い経験を生み出すイベントとして残ってくれば良いなと思いました。」

2-5-3-2. 学校生活以外での機会

親睦イベントを通しての関わり

これまで毎年、3年生のゼミが始まるとすぐに、メンバーから飲み会などの親睦イベントの提案があり、実施されるのが通例であった。しかし、コロナ禍においては大学としての規制も設けられていたため、飲酒なしであってもメンバー全員で会食をすることが難しい状況だった。黙食や1テーブル4名以下であれば会食することができた時期はあったのだが、彼らの望む親睦イメージにはそぐわないとのことで、実施は見送られた。また、飲食を伴わない交流であれば、より実施の可能性は高まるため、花火大会・スポーツ・ポーリングなどの

レクリエーションが提案されたこともあった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の波がまたいつ起きるのか見えない中、計画を立て、複数メンバーの予定を合わせて実行しようというエネルギーはメンバーの中に生まれなかったようで、結局2年の間に親睦イベントが開催されることは一度もなかった。

例年に比べてあまりにも交流が少なくなっていると感じたため、2020年秋頃、筆者主導で、同学年でのオンライン飲み会と、OB・OGとのオンライン座談会を企画し呼びかけたものの、参加希望者はいないという結果になった。例年、対面であれば必ず参加者がいたこれらの機会も、オンラインでの関わりとなるとニーズが生まれなかったものと考えられる。

ゼミ合宿

当ゼミでは、毎年夏休みに、1泊2日か2泊3日の3・4年合同ゼミ合宿を実施していた。インターンシップや部活動との重複、経済的な理由などから、メンバー全員の参加は難しい年がほとんどだったが、合宿前には2学年全員で顔合わせをし、グループ実習を行なうことによって、合宿前から学年を超えた関係づくりをしていた。また、合宿中は2学年合同でのグループ活動を数種類実施し、随時メンバーを入れ替えながら取り組むため、多様なメンバーとの関わりから学び合う機会となっていた。しかし、コロナ禍では宿泊を伴う活動に対して数々の制約があり、親睦イベント以上に、彼らが望むような合宿の場を作ることが難しい状況であった。結果として、開催は2年に渡り断念せざるを得なかったため、学年を超えた縦の繋がりが例年よりも弱くなったものと推察される。

以上のように、この2年間は、例年に比べて関わりの機会が減少しただけでなく、親睦会や合宿のような学外での交流機会は全く設けることができなかった。しかしながら、対面での3・4年生合同ゼミや、2年生へのゼミ説明会時に体験した異学年メンバーとの関わりは、同学年メンバーとのゼミだけでは得られない気づきや学びをもたらしていたようでもあった。そのため、決して諦めることなく、その時々状況に併せ、可能な範囲で関わりの機会を設けていくことが重要だと感じている。

「先輩や後輩などより多くの人と関わることで、同級生のメンバーとはまた別の関わり方を学ぶことができました。歳の違う人と関わるにはどうしたらいいのかを考えることで考え方の視野が広がったと思いました。分かりやすい説明や失礼のない発言などを考えることはゼミ活動だけでなく社会人になったうえでも大事になってくることなので、忘れずに行動していきたいと思います。」

こども食堂の活動

当ゼミでは、2017年より、毎年数名の有志メンバーが、某こども食堂の活動に参加し続けてきた。コロナ禍で、この活動にも大きな変化が生じた。

コロナ禍以前は、主に会食時のフロア対応と、食事前後のこども達との交流を全面的に担ってきたゼミメンバーであったが、コロナ禍では大勢集っての会食の場を設けることができなくなってしまった。そのため、2020年からの活動は、目まぐるしく変化する状況を見ながら、新しいチャレンジの連続となった。しかし、そのような経験をしたからこそ、自身の成長の実感を持てた様子が伝わってきた。

まず、会食ができなくなった代わりに手作り弁当を販売することになった際には、SNSを使った広報を考案し、積極的に実施した。これにより、お弁当自体の質の良さも相まって、当活動はあっという間に行列ができるほどの大盛況となった。こうなると、販売時のオペレーションを工夫する必要が生じ、毎回、よりよい方法を検討しては試みるというサイクルを繰り返した。

また、単にお弁当を販売するだけでは失われてしまう、これまで一緒に遊んできたこども達とのつながりを保つために、メッセージを添えた折り紙やリーフレットを作成し、お弁当に添える活動を始めた。こどもたちの食育と楽しみを兼ねたさつまいも栽培、コロナ禍で売上が落ち込んでしまっているという飲食店支援につながるような企画など、これまでになかった新しい企画を考えては、次々に試みていった。これまで毎年8月に開催していた夏祭りも、従来と同じように開催すると密が避けられないため、オンライン夏祭りの実行に向けて話し合い、創意工夫を凝らした内容を考えあげた。ただ、この企画に関しては広報がうまくいかなかったこともあって集客できず、残念ながら開催を断念することとなった。

筆者にとっては、楽しいことを次々と発想し、チャレンジし続ける彼らの柔軟さに驚愕するばかりであった。コロナ禍で大きく活動を制限されたこども食堂をどのように続けることができるのだろうか…と途方に暮れていた時期もあったが、彼らのおかげで支えられ、前向きに取り組み続けることができたと感じている。

「こども食堂の活動では、毎月のミーティングで意見やアイデアを発表しました。最初は自分の意見を出すことに躊躇していましたが、他のこども食堂班のメンバーがどんどんアイデアを出しているのを見て、自分も言わないといけないなと思いました。自分の出したアイデアが形となって実現していくのはとてもやりがいがあったし、デザインやものづくりという自分の得意なことで発信し、それを周りに褒めてもらえたことも嬉しく、自信につながりました。」

「ゼミでは、毎回グループ活動があったり、こども食堂で幅広い年代の

方と関わるがあったりと、コミュニケーションを取らざるを得ない機会ばかりであった。そのように多くの機会を体験したことにより、同年代だけでなく違う世代とのコミュニケーションにも自信がついた。相手の話を聞く時は共感することや、自分の意見を伝える時は相手にわかりやすいように伝えるなどたくさんのことを学んだ。この体験があったからこそ、就職活動の面接などでも世代の違う面接官の方達と程よい緊張感で話せたと思う。4月から社会に出ると、コミュニケーションがより大事になってくる。ゼミで学んだことを活かして、お客様の記憶に残るコミュニケーションをしていきたいと思う。」

「こども食堂や卒論の活動では、自分にできることは何かを考え、主体的に行動することを意識していた。自分の得意な部分を引き受けることで組織活動が円滑にいくことを学んだ。一方で、今までは、できないことやわからないことがあった時に、私は自分で解決することが多かった。けれど、他のメンバーが「なんかあったら言ってね」と声をかけてくれたり、逆にわからないことがあった時に私を頼ってくれたりしたことで、素直に頼ることもできた。メンバーが寛容であったこともあると思うが、人を頼ることも必要であることがわかった。」

2-5-4. 実習について

2020年度の実践の中でも触れてきたが、ここで実習に関する気づきもまとめておきたい。この2年間の実践を通して、これまで対面で実施してきた実習をオンライン上で実施したこともあれば、実施を諦めたり避けたものもあった。工夫の余地はまだ十分にあるという感覚を持ちながらではあるが、現時点での気づきを記していく。

対面実施と変わらずオンラインでも実施できるタイプの実習

今回初めてオンラインでラボラトリー方式の体験学習を実施してみて、対面時とあまり変わらず実施できると感じたのは、コンセンサス実習（例えば、2-2の項に記した実習『価値のランキング』（津村・星野，1996）など）であった。コンセンサス実習は、配布資料以外は特別な準備物も必要ない場合が多く、メンバーが話し合いに参加さえできれば、最低限の体験は確保できる。またスタッフの側も、これまで対面で実施してきた手続きや作成した資料を特に変更する必要がないため、実施形態が変わっても、比較的安心感を持ちながら進めることができると思われる。

なお、オンライン実施の場合は、印刷物資料を配布することができないため、各自で、データ配布した資料を予め印刷してもらうか、閲覧や記入しやすい媒体を使ってもらうことになる。当ゼミのメンバー達は、ゼミの開始時から特に混乱する様子もなく、各自で資料を準備したり、PC・タブレット・スマートフォン

ンなど複数の機器を上手に併用しながら実習に参加する様子が見られた。このようなツールの利用に関しては、デジタル・ネイティブと呼ばれる世代の大学生が対象の場合は、スタッフよりも、参加者同士でサポートしあってもらう方がスムーズに進むようにも感じた。これは観方を変えれば、参加者の年齢層を踏まえ、事前の準備をすることが重要とも言えるだろう。例えば、社会人参加者が大半を占める南山大学人間関係研究センターの人間関係講座では、何度かの試行錯誤の結果、オンライン開催の場合には通し番号を大きく表記した印刷資料を事前に郵送している。この対応により、講座当日は混乱なく、安心して実習を進められるようになってきているため、その時の参加者の状況を豊かに想像しながら、事前の準備をしていくことが大切だと感じる。

また、同じく2020年度の実施内容の項で紹介した、実習『はなす・きく・みる』と、『POPO』も、対面時とほぼ同様の手続きと資料で実施できたと感じている。ただこれは手続的な話であり、実習の中で起きているプロセスには違いが生まれていることだろう。オンラインのコミュニケーションに関して、筆者はまだ全くもって不勉強であり、ラボラトリー方式の体験学習とのつながりについても、これから検討と議論を深めていかねばならないと考えている。現時点で筆者がわずかに持っている感覚を記しておくならば、オンライン・対面それぞれの体験から得られた気づきは、まず、それぞれのコミュニケーションの中で生かすことを前提にトレーニングしていく方がよいように感じている。ラボラトリー方式の体験学習の立場に立てば、対面でもオンラインでも、人と人が関わることによって、必ずプロセスは起きている。しかし、それを捉えるための情報源や注意を向ける範囲は、それぞれの特性があるようにも思われる。そのため、より適した側面に目を向けることができれば、私たちの関わりの中で起きていることをより豊かに、より適切に捉えることができるようになるのではないだろうか。もし、このような何らかの違いを粗雑に扱ってしまうと、「直接会って話せばすぐに相手の気持ちがわかるけれど、オンラインでは話していてもちっとも気持ちがわからないし、どうせわからない。」というような関わりが生まれかねないと危惧している。仕事の場面ではオンラインでの会議や商談が頻繁に行われるようになり、医療や教育の場面ではオンライン診療や面談も盛んに行われている。コロナ感染のリスクを減らすために、高齢の方や遠方の方とオンラインで会話をすることも珍しくなくなった今、対面であってもオンラインであっても、それぞれの世界の中で、目の前にいる人を大切にしながら関わることはとても大切なことである。ラボラトリー方式の体験学習による実践はまだ始まったばかりであるが、コロナ禍を新たな探求の機会と捉え、よりよい関わりをつくるための知見を積み上げていく必要がある。

なお、これらの実習をオンラインで実施する場合は、対面実施の際よりも時間が若干長くかかることに留意する必要がある。具体的には、参加者の反応がわかりにくい実習の手続き等の確認に時間がかかること、また、機会操作

の時間が生じることなど、本当に微々たることの積み重ねだと考えられるが、スケジュールを組む際には、対面実施よりも時間の余裕をもって計画することが大切である。

オンラインでは実施しにくい、あるいは工夫が必要なタイプの実習

何かを制作するタイプの実習、特に共同作業で一つの作品を作る『フィンガー・ペインティング』や『オブジェづくり』のような実習は実施できなかった。とは言え、オンライン上でも、画面共有したホワイトボードを使って共同で作品を創ることや、写真素材などを使いながら一つのコラージュ作品を創るような実習であれば、実施可能だとも考えられる。ただ、創造的な実習は、もともと苦手意識を持つ人とそうでない人の差が大きくなりやすい。これに加え、デジタルツールの操作やデジタル素材の活用スキルが必要になってくると、苦手意識を持つ人にとっては負担が大きくなり、グループのプロセスへ与える影響もより一層大きくなる可能性があると考えられる。

その一方で、2-1で紹介したように、2020年Q1においてオンラインでの活動時間が制限されたことから、新しい発見もあった。今回の実践では、予め与えられたお題に対して各自で制作・準備して集まり、その作品を見せ合いながらわかちあう、という進め方をせざるをえない回があった。これにより、驚くほど丁寧な素晴らしい作品を創って参加してくれるメンバーが現れ、わかちあいの場でその人の才能を知る機会を持てたことは大収穫だったと感じる。ここで気づいたお互いの強みは、その後の課外活動も含めて、大いに認め合いながら発揮し合うことにつながっていった。

実習『心の窓』のように、紙に描いたものをお互いに見せ合う場合は、Zoomで仮想背景を使っているとうまく映らず見にくい、という状況が度々起きた。また、色の濃さや大きさによってもわかりにくい場合があるため、実習の導入の際に、大きくはっきりと描くこと、また、可能であればわかちあい前に写真に撮って画面共有できるよう準備してもらおうと、よりお互いの作品を味わいやすくなると感じた。

屋外を活用した実習

コロナ禍では、密を避け、お互いの距離をとることが必須となった。このことは、ようやく対面での実習が再開できた時期、よりよい人間関係づくりやコミュニケーション目指してトレーニングする上でかなりの妨げになると感じ、この状況に慣れるまでは強いストレスにもなっていた。そこで、屋外を利用した実習を例年より多く取り入れてみた。気候のいい時期を選ぶことは大切であるが、今回初めて取り組んだ『おさんぽ』や『いりなか探索』では、メンバー同士で自由にゆったりとした関わりの時を楽しみ、教室とは全く違う表情で教室に戻ってきたことが印象的であった。このような活動は、自分の大学やその

地域を改めて知ることができ、コミュニティのメンバーとしての意識を高めることにもつながっていったと感じる。

3. コロナ禍のラボラトリー方式の体験学習から生まれていた気づき・学び

ここまで、2020年度のオンラインを中心に実施してきたゼミの実践、そして、その後対面実施が復活した2021年度も含めて、コロナ禍によってラボラトリー方式の体験学習を通じた学びの場にかけていた変化と、その影響についてふりかえてきた。改めてふりかえてみると、コロナ禍前から大きく変化したこと、失われたことが多くあったと考えられた。しかし決してネガティブな影響や喪失だけではなく、参加者達の前向きな試行錯誤や新たなチャレンジを生み出していたことも明らかになった。

ここからは、メンバーがゼミの活動を終える2022年2月初旬に提出されたレポートの記述内容を手がかりに、オンラインでの関わりを含むコロナ禍2年間のラボラトリー方式の体験学習が、参加者達の変化・成長にどのような影響を及ぼしていたのかについて、改めて検討していきたい。

3-1. 2年間を通しての気づき・学び・変化成長

以下では、メンバーが記述した最終レポート、すなわち2年間のゼミ活動全般のふりかえりの記述文と、その文章から得られた頻出語及び共起ネットワーク図を手がかりとしながら、メンバー達がコロナ禍のラボラトリー方式の体験学習を通して気づいたこと、学んだことについて検討していく。

研究への参加の承諾を得た14名の最終レポート全文をデータとし、テキストマイニングソフト kh-coder を用いて算出された頻出語の上位90位・113語を表5に、共起ネットワーク図を図2に示す。これらの結果と、最終レポートの記述内容を重ねながら、コロナ禍のラボラトリー方式の体験学習を通して生まれていた気づき・学び・変化成長について検討をおこなった。

表5. 最終レポートにおける頻出上位語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	自分	147	40	ありがとう	15	79	一番	8
2	思う	133		書く			会話	
3	ゼミ	116		水色			嬉しい	
4	メンバー	87	コミュニケーション	後輩				
5	活動	69	フィードバック	自信				
6	中尾	45	プロセス	実際				
7	人	39	気づく	上手い				
8	グループ	36	経験	状態				
9	卒論	34	最初	生活				
10	年間	33	特に	大きい				
11	感じる	32	気持ち	分かる				
12	実習	31	社会	90	一緒	7		
13	学ぶ	30	相手		印象			
14	自身	27	目標		関係			
	出来る		話		結果			
16	本当に	25	個性		考え			
	良い		不安		作成			
18	振り返る	23	関わり		参加			
19	意見	22	強み		残る			
	今		場	時間				
21	言う	21	卒業	就職				
	授業		大切	状況				
	先生		論文	食堂				
	他		たくさん	心				
26	関わる	20	オンライン	性格				
	行動		ジャーナル	接す				
28	研究	19	楽しい	先輩				
	考える		今後	全員				
	行う		子	全体				
	持つ		出す	他者				
	伝える		積極	多く				
33	意識	18	体験	大学				
	知る		部分	普段				
35	成長	17	機会	聞く				
	入る		強い	変わる				
37	見る	16	少し	9				
	最後		前					
	話す		大変					
			評価					

網かけをした語は、共起ネットワーク図上に現れていたものである

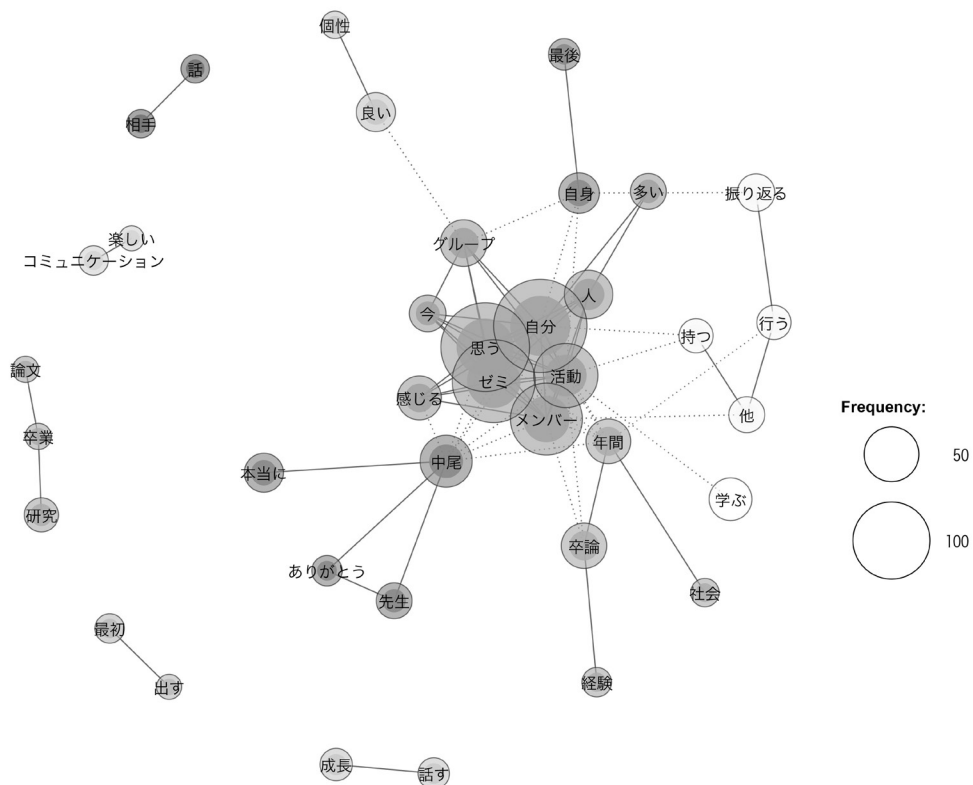


図2. 最終レポート文から得られた共起ネットワーク図

まず始めに、最終レポートに記述された内容を概観したところ、明らかに否定的な記述は見られず、本ゼミでの2年間は総じて肯定的に受け止められていると考えられた。レポートの冒頭、あるいは最後の文章として、以下のような記述がみとめられた。

「大学の中で一番楽しく、そして生きていくうえで一番たべになることが学べました。このゼミで学ぶことができてよかったです。」

「このゼミでよかったですと思います。多様な特徴、性格のメンバーがいるゼミで2年間一緒に学ぶことができて楽しかったです。」

「ゼミでみんなと話していると、どんな意見でも受け止めてくれて、特に就職活動の時は、みんなと話すと週の楽しみでもあり、ストレス発散できていました。みんなの顔を見るとホッとするくらいでした。短い2年間でしたが、十分に仲を深めることが出来たと思います。」

「この2年間は、コロナ禍もあり、大変な状況だったけど先生やメンバーとの関わりが楽しかったので、毎回の授業を楽しむことができました。人との関わりを十分に体験でき、自分の強みを成長させることができたゼミ活動でした。この経験は社会人になっても発揮していきたいです。2年間

一緒に活動してくれたメンバーに感謝の気持ちを伝えたいです。」

「このゼミに入って、自分の強みや良さを知ることが出来たこと、様々な価値観を持った友人ができたこと、先生に出会えたこと、本当に自分自身、成長し貴重な経験をすることができました。」

「このゼミに入ろうと思ったきっかけは、人見知りな自分を変えたかったからでした。最初に想像していたように活発に活動することは難しかったですし、時間はかかってしまいましたが、以前の自分より自分の意見を主張できるようになったと思います。この2年間で学んだことを今後の人生に生かしていきたいです。」

次に、共起ネットワーク図に表れた結果と、レポートの記述文を手がかりとしながら、コロナ禍のラボラトリー方式の体験学習を通して生まれた気づきや学びについて検討したところ、以下の4つの側面は示すことができそうだと考えた。実際のところ、最終レポートには本当にメンバーそれぞれの多様な体験と気づき・学びが綴られており、その豊かさに圧倒されたというのが正直な気持ちである。そのような中でも、複数のメンバーで重なり合うと考えられた内容について、大きな枠組みではあるが、以下の4つを提示したい。

まず、図中央の最も大きなネットワークと重なる内容として、①グループで活動をした経験からの気づき・学び・変化成長 ②自分らしさに気づき、自分らしく、人と共にいることを大切にする という側面があると考えた。これらは、共起ネットワーク図上で上につながっている、『個性』『良い』そして『自身』『最後』との重なりもあると考えられた。

①グループで活動をした経験からの気づき・学び・変化成長

参加者にとって、2年間のゼミを通して体験した数々のグループ活動、その中でも特に、卒業研究にグループで取り組んだ経験から多様な気づきや学びを得ている様子がうかがわれた。これらの気づきや学びは、参加者自身で自分の体験を吟味し、仮説化したことを試みることによって生まれていたとも考えられた。

「卒業研究では、高校時代の仲間割れの経験から、初めはグループで研究を進める事に大きな不安を抱いており、喧嘩をしないように他のメンバーに合わせる事に必死でした。しかし、本格的に執筆活動を始めた夏頃から、一緒に昼食を食べるようになり卒論以外の話題で盛り上がり、少し不安が和らいだのを覚えています。その後はメンバー全員が妥協せず、話し合える雰囲気が出来上がり、私自身も気を遣いすぎず発言できるようになりました。研究や執筆活動を進める中で、他人の意見を真っ向から否定しない、自分の意見を主張するのは良いがやり過ぎてはいけない、面倒な

ことには率先して取り組む、などグループで行動する時の自分なりの立ち振る舞い方を学ぶことができました。結果として、一度も仲間割れや言い合いをすることなく、妥協することもなく全員が納得できる論文を作り上げる事ができました。また、論文を作り上げられたこと以上に、「他人と目標に向かって努力する」ことへの苦手意識を克服できたことが、とても嬉しく卒論メンバーには本当に感謝しています。」

「2年間のゼミ活動を通して感じたこと、学んだこと、大切だと思ったことは、まず最初に、「チームで動いていく」ということである。これは主に卒業論文の活動を通して学ぶことができた。自分は元々、自分がやった方が早いと感じることは率先してやってしまったり、リーダー的な立場になることが多かった。頼られる立場は嫌いではなかったし、その方が上手く進むという自信も少しあった。しかし、少し忙しい時期などはキャパオーバーしてしまってかなりメンタルをやられてしまったこともあった。その際に、自分の仕事をチームメンバーに頼んだこともあったが、快く引き受けてくれた。この経験から学んだのは、「必要以上に抱え込まない」「信じて人を頼ること」である。この2つに気づいてからは気持ちが楽になり、チームとしてもスムーズに動いていくことができた。社会人になるとよりチームで動いていくが増えると考えられるため、意識していきたいと思う。」

②自分らしさに気づき、自分らしく、人と共にいることを大切にする

メンバーとの関わりを通して、ゼミが始まった当初は十分でなかった自己理解が深まったこと、また、自分らしさや自分の強みを大切にしながら、できるだけありのままの自分で人と関わることを大切にしていきたいと思えるようになった様子が見えてきた。このことは次の③とも関連してくるのだが、自分とは異なる個性を持ったメンバーとの関わりを通して、お互いの違いを感じた体験が大きく影響したものと考えられる。

「自分は元々引っ込み思案な性格であり、自分の意見を言うのが苦手な人間であった。その性格は大学に入ってからある程度改善したが、素の自分を見せるというのは変わらず苦手で、仲の良い人にしか出来ていなかったように思う。しかし、ゼミのメンバーはみんな個性豊かで、自分らしさを出して人と接しているように思えた。そんなメンバーを見ていて、自分も徐々に自分らしさを出せるようになっていったように思う。最初は緊張したゼミも、段々と居心地の良い場所が変わっていった。色んなタイプのメンバーがいたからこそ、すごく素敵なゼミになったのだと思う。これからも、人に対してすぐ素の自分を見せることは難しいと思うが、相手のことを知りたいと思うこと・自分を知って欲しいと思うことは大切に人

と接していきたいと思う。」

「ゼミに入ってから、今の気持ちを色や形で表現する実習など、自分の気持ちを表現することが多く、初めは恥ずかしさが原因で上手く表現できずその場しのぎで過ごしていました。しかし回数を重ねるに連れ、他のメンバーが素直に気持ちや意見を伝えていることに羨ましさを覚え、私も素直な自分の気持ちや意見を伝えることができるように心がけました。このような経験から、着飾らなくても周りの人は受け入れてくれる事を学び、ありのままの自分を表現する方法を身に付けられたと感じています。」

「3年生のQ1の授業では、初めて関わるメンバーと初めてのオンライン授業だったので、緊張ばかりしていて、なかなか積極的に自分から話すことが出来ませんでした。ジャーナルにも積極的に話せないことばかりを毎回記述していたのを覚えています。ムードメーカー、話上手な子、聞き上手な子、話を回すのが上手な子、本当に1回話しただけでも、それぞれの良さが出ていて、本当に多種多様なメンバーだなと感じていました。そんな中、みんなの個性に圧倒され、自分の強みや個性が分からなくなり、悩んだこともありました。私の性格上、人と比較してしまうので、自分にはない能力を持っている子がうらやましくなり、悲しい気持ちになることも多かったです。しかし、実習を通して、自分では気づいていない長所をたくさん教えてもらうことが出来、「自分は自分のいいところがあり、足りないところは他の人が補ってくれているんだ」というくらいの心持ちでいられるようになりました。もちろん足りない部分はこれから磨いていきたいと思っていますが、あまり人と比較しない方がいいことも身を持って体験しました。」

③個性豊かなメンバーと関わることでよかった・影響を受けた

3つ目に、図2中央の最も大きなネットワーク、そしてそこから上につながっている『個性』『良い』と重なる内容として、この枠組みを考えた。この学年は、当ゼミへの参加希望者が例年になく多かったため、「できるだけ多様なメンバーで構成されるように」という側面を大切にしながら選考を行った経緯があった。その甲斐あってか、参加者達は普段関わることの少ないタイプの人と関わり、その違いから気づき、学び合い、自分らしさを認めることにつながっていった様子がうかがわれた。

「このゼミの一員になってからは、今まで関わる事がなかったような人たちばかりで戸惑うことばかりでした。しかし、大学生活で唯一身に付けることのできた協調性、コミュニケーション力を武器に、メンバーとの関係性を深めることができたと思っています。リモート授業、全員が初めての経験ではありましたが、対面授業とあまり変わらないような会話がで

きたと感じています。』

「外集団を同質だとみなして「うちは個性的なメンバーです」と言うのは好きではなかったんですが、個性的なメンバーのゼミに入れて良かったです。」

「こう振り返ってみると、私は他の中尾ゼミメンバーにとってもいい影響を受けてきたのだと感じます。ゼミメンバーにフィードバックしてもらいましたが、逆に私もゼミメンバーに対してフィードバックをたくさんしてきました。それぞれ個性がバラバラなメンバーなので、自分にはない強みを皆が持っていて、それを見ならうこともたくさんありました。このメンバーと活動ができて本当に良かったです。」

「私はこの2年間のゼミ活動で、人との関わりが1番印象に残っています。3年生になってゼミがスタートした時はオンライン授業でメンバーと直接会うことはできませんでした。さらに、全く知らないメンバーが多かったのでこれからのゼミ活動が少し不安でした。しかし、授業をしていく中でその不安は払拭されました。どのメンバーも関わりやすく授業を楽しく進めることができました。各メンバー色々な考えを持っているため、自分とは違う考え方や触れ合うことで勉強になりました。自分に足りなかった部分を持っているメンバーが多くいて、このゼミ活動で成長しようと思えました。」

「ゼミに入ってから、今の気持ちを色や形で表現する実習など、自分の気持ちを表現することが多く、初めは恥ずかしさが原因で上手く表現できずその場しのぎで過ごしていました。しかし回数を重ねるに連れ、他のメンバーが素直に気持ちや意見を伝えていることに羨ましさを覚え、私も素直な自分の気持ちや意見を伝えることができるように心がけました。このような経験から、着飾らなくても周りの人は受け入れてくれる事を学び、ありのままの自分を表現する方法を身に付けられたと感じています。」

④体験し、ふりかえり、わかちあうことを通して学び、成長した

4つ目に、図2中央の最も大きなネットワーク、そしてそこから右につながる『振り返る』『行う』『他』『持つ』と重なる内容として、この枠組みがあるものと考えた。参加者達は、毎回のゼミで、図3に示すような体験学習の循環過程(津村, 2019 p.31-33;星野, 2005)をたどる体験を重ねることによって、体験から学ぶ力を高め、ゼミの時間だけでなく、日常の中でも活用できるようになっていったと考えられた。またこれは、共に体験の時間を過ごしたメンバーとのわかちあいやフィードバックの授受を通して、気づきを広げ、学び合うことにつながったものと考えられる。

「総じて、このゼミで過ごした2年間はとても充実したものであり、普

段の学生生活では経験できないことができたと思います。ラボラトリー方式の普段の授業では、フィードバックを通して、相手を褒め、分析しました。それが普段の日常生活でも出てしまうことが増えてきました。私は良いことと捉えています。」

「ゼミを通してさまざまな気づきや学びがあったように思います。まず、自分自身に対してよくふりかえりをするようになったと思います。毎週の授業の初めには行動目標をたてて最後には行動目標を達成できたのかを含めてふりかえりを行ってきました。日頃から自分自身の行動や発言をふりかえることは今思うとやってこなかったことであり、改めて自分を見つめ直す良い機会、習慣になりました。たった週に一度のことでしたがこれまで2年間の積み重ねのおかげかゼミ以外の時でも目標を立てて自らをふりかえることを習慣化できたように思います。時々何かうまくいかないことがあるときにはなぜできていないのか、また過去の成功体験から今なにをすべきかを考えることができたと思っています。私はもともと自分よりも高すぎる目標を設定しがちで、途中で嫌になったり諦めたりと挫折しがちでした。しかし小さい目標を立てることの大事さと、細かい単位ごとに区切ってふりかえることでいずれ大きな目標を達成できるのではないかというように考えることができるようになりました。」

「ゼミでは自分自身をふりかえるだけでなく、周囲のゼミメンバーから多くの学びを得たと思います。ゼミの活動では一人のメンバーの言動を注視して良いところを発見したり、グループ内で誰がどのような働きをしていたのかをよく考えることができたと思います。なんとなくこの人いいなとか助かったなという気持ちに『なぜ』を考えて、意識的に見てみることで自分自身に取り入れたいところを見つけることができました。自分とは異なる魅力を持ったメンバーがいたからこそものだと思いました。これからも人の良い部分を見つけ、それだけでなく本人に感謝と共に伝えていきたいと思いました。他の人からのフィードバックによって自分の良さや特徴にも気づくことができたし、グループ内での役割や改善すべき点も発見できたので、強みを伸ばしつつ他の部分を直していけたらいいなと思いました。」

「その当時は、自分のことをなんとなくでしかわかっておらず、自分自身に自信がなかったわけではないですが、強みと言われると言語化することが難しかったです。もし今、自分の強みを考えてみてと言われたら、色々浮かんで来ると思います。それは、2年間中尾ゼミで、様々な活動をしてきたからに他なりません。2年間を通して授業では幾度となく実習を行い、その度にゼミメンバーから自分の行動についてフィードバックをもらいました。フィードバックで伝えてもらうことは、内容に共通点があることが多く、次第に「これは自分だけの特性で、強みなのだ」と思うよう

になりました。』

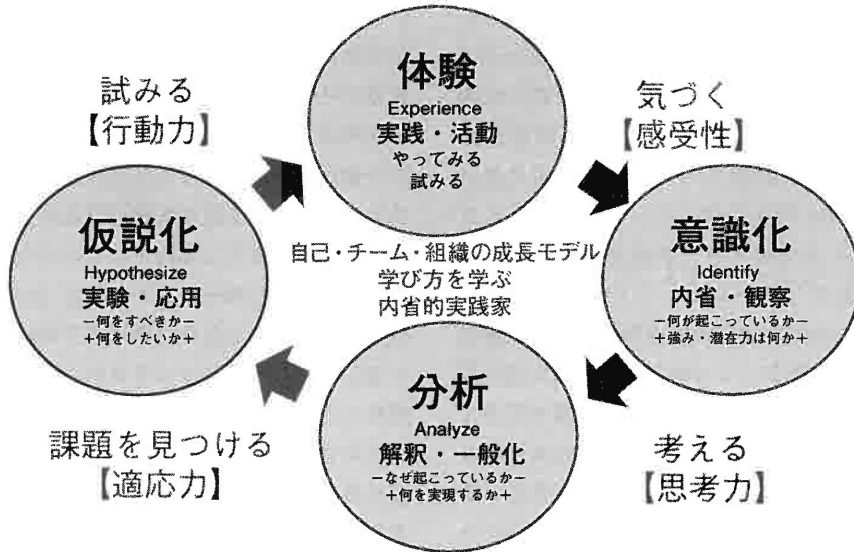


図3. 体験学習の循環過程の4つのステップ (津村, 2019)

こうして、コロナ禍と共に始まった2年間のゼミ活動をふりかえると、結果として、これまでの年と変わらぬ、いや、もしかしたら例年以上の学びの実感と満足感をもって、卒業の日を迎えてくれたのかもしれない、とまで感じる。ただ、これはあくまでも筆者の主観的な感覚であり、コロナ禍前のデータと比較検討できない状況であるため、これ以上の言及は避けたいと思う。

このような結果につながったことには、本当に多様な要因が影響していたと思うが、参加者と筆者が共に探求してきたポイントとなることを3点示したい。これらは、今後また大きな変化への対応を迫られた中でラボラトリー方式の体験学習を実践する際に、何らかの指針となってくれるかもしれない。また、決して有事の際に限らず、改めて、ラボラトリー方式の体験学習の実践において意識していく必要があることだとも感じている。

今ここの探求

本稿の冒頭にも記したように、ラボラトリー方式の体験学習とは、「特別に設計された人と人が関わる場において、“今ここ”での参加者の体験を素材(データ)として、人間や人間関係を参加者とファシリテーターとが共に探求する学習(津村, 2010; 津村, 2019)」とされる学習方法である。ただ、このコロナ禍2年間の実践の中で、筆者は度々、これまで自分ではどれほど本当に“今ここ”に注意を向けながら、この実践をできていただろうかと考えた。体験学習を実践していると、全く同じ実習に取り組んでいても、その時々で違うプロセスが起き、それが私たちの気づきや学びにつながっていくと実感する。と

はいえ、スタッフとして同じ実習に繰り返し取り組んでいると、「大体こうなる」という馴れが生まれてしまっていることは否めない。これは、“今ここ”に落ち着いた気持ちで関わることができるというメリットがある一方で、本当に“今ここ”で起きているプロセスを見逃したり、歪めて捉えることにもつながっていることだろう。

一方でこの2年間は、新型コロナウイルスがまだまだ未知の存在であり、この先の状況がどのように変化していくのか、全く予想がつかなかった。そのため、ゼミの中で取り組む内容を考える際も、今できること、やっておく必要があることは？と、常に“今ここ”のベストを考え、その都度取り組んできたと感じる。また、コロナ禍のラボラトリー方式の体験学習の実践では、小さなことから大きなことまで、ここまで記してきたような沢山の変化に対応してきた。オンラインやマスクの使用などにより参加者の様子を捉えにくくなったため、これまで以上に注意深く“今ここ”の様子を捉えようとしていたとも感じる。これはスタッフである筆者だけでなく、参加者達も同様であっただろう。この2年間で経験してきた“今ここ”の探求の積み重ねは、少し大袈裟ではあるが、難しい状況の中にあっても今の関わりを生き切る力を高め、お互いに対する深い気づきにつながっていったものと思われる。

わかちあいを通しての探求

この2年間の実践では、オンラインであっても、メンバー同士が相互に話しきくことのできる状況でゼミを続けられたことが、プラスに影響していたと考えられる。このような学びの場が確保されたことによって、参加者達は、一人で体験したことを一人で内省するに留まることなく、何かを『共に体験』し、そこで生まれた気づきをメンバーと共に『わかちあう』ことができた。わかちあいでは、同じコンテンツを体験していても、そこで感じることや考えることはそれぞれ異なることを知って驚いたり、自分と似た思いを持っている人がいてほっとしたりと、様々なプロセスを体験できていた様子が伝わってきた。そして、始めは他者と違うことを恐れる気持ちの強かったメンバーも、わかちあいの中で、違いを認めてもらったり、自分とは違う他者に対して魅力を感じる体験を重ね、違いはその人の素晴らしい個性であり強みであるということ、本当に心から実感できていったと考えられる。

また、こうしてお互いの特徴が少しずつわかってくると、実際に会えないことへのもどかしさが生まれ、直接会って、もっと自由に関わりたいという欲求が生まれていく様子もうかがわれた。これは、対面で関わることが当たり前だった従来のゼミでは起こり得ないプロセスであり、私たちにとって一つの貴重な体験だったと、ふりかえってみて改めて思う。

今後も、きっと様々な状況が起こりうるであろうが、ラボラトリー方式の体験学習の肝とも言えるわかちあいの場は、どんな時でもできる限り確保し、わ

かちあいを通して一人ひとりの違いを探求し、気づきを深め、理解し合っていくことを大切にしていきたい。

安心・安全な関わりの探求

違いを持ったメンバーの集う場が心理的に安全なものになるように、ということ、間違いなくコロナ禍前からも意識してきたことであったが、新型コロナウイルスの登場によってその質に変化が生まれていることも感じながら、この2年間はゼミの場づくりに取り組んできた。個人の状況に深く立ち入ることはできないため、詳細は把握できていないが、メンバーによってコロナに対する不安感も、感染によって生じるリスクの大きさにも、大きな差があるものと想像された。例えば、同居するご家族に高齢の方が含まれるか否か、またご家族の職業などは、それぞれの新型コロナウイルス感染症に対する思いに影響を与えていたと感じる。そのため、メンバーの思いを確認した上で対面開催の仕方を決めること、また、対面する際はできる限りの感染対策をすることも心がけた。

感染対策については、本学の基準が比較的厳しいため、お互いにこれを遵守しながら活動すれば大きな問題には繋がらないだろうと思えたことが幸いだっただろう。ラボラトリー方式の体験学習の実習は、どうしても、お互い向き合っ

て話をする場面や、グループで協力して作業に取り組む場面が生じる。そのため、このような実習をした際には、区切りのタイミングで、手指と共に机やペンなどの道具も消毒し、少しでも安全な状態を保てるよう心がけた。ゼミ内で『お清め』と呼んでいたこの作業は、感染対策効果としては気休めであったかもしれない。しかし、このウィルスの様相がまだよくわからず不安ばかりが先行する中、お互いの安全を願いながら、かつ、半分冗談のように笑い合いながら続けてきた行動は、不安感の大きかったメンバーの気持ちをサポートすることにつながっていたと感じる。

コロナ禍を体験し、スタッフとしてどのような安心・安全の対応を必要とされるのかわからない、ということを知った。ただ、スタッフは深刻な状況になった時こそユーモアを忘れず、メンバーが少しでものびのびと、やりたいことに思いきりチャレンジできるよう、一人ひとりの思いに意識を向けていくことが大切だと感じている。

おわりに

非常に長い記述となってしまったが、2年間のゼミ活動をふりかえってみると、やはり本当に様々な体験をし、気づきや学びを得てきたと感じる。スタッフとしての自分をふりかえると、突然やってくる変化に対して、無我夢中で必死に向き合ってきた、というのが率直な感想であり、特に、オンラインでの体験学習については、正直なところ、うまくいったという実感が全く持っていない

い。しかし、参加者達が、大変な状況の中にあっても常に前向きに、筆者と共にラボラトリー方式の体験学習を通して探求とチャレンジを続けてくれたおかげで、一度も嫌だと思わず、苦しみながらも共に楽しみながら、この状況を乗り越えられたと感じる。もしかすると、苦手意識で一杯の中、オンラインの機器操作を失敗する度に平謝りしたり、不安な気持ちを正直に話したりしてきたことによって、むしろ今までよりも参加者達と近い関係になれたのかも知れない。このような幸せな学びの時を共にしてくれたメンバー達に、改めて感謝の思いを捧げたい。

コロナ禍はまだ続いている。ここまで体験してきたコロナ禍における経験を活かし、これからも“今ここ”に意識を向け、参加者と共に、私たちの関わりを探求し続けていきたいと思う。

付記：本研究は南山大学研究倫理審査委員会における倫理審査を受け、2022年3月に承認されている。

参考文献・引用文献

- Cooperrider, D. L., & Whitney, D. (2005). *Appreciative inquiry: A positive revolution in change*. San Francisco, CA: Berrett-Koehler Publishers. (クーバーライダー, D. L.・ウィットニー, D. 市瀬博基(訳)(2006). *AI「最高の瞬間」を引き出す組織開発 - 未来志向の“問いかけ”が会社を救う -* PHP 研究所)
- 星野欣生 (2003) エクササイズⅢ『たずねる (聴く), こたえる (話す), 観る』人間関係づくりトレーニング pp.60-63 金子書房
- 星野欣生 (2005) 体験から学ぶということ—体験学習の循環過程— 人間関係トレーニング第2版 pp.1-6 ナカニシヤ出版
- 星野欣生 (2007) 小講義Ⅱ「グループの何をみるのか」—グループ診断と介入— 職場の人間関係づくりトレーニング pp.131-134 金子書房
- 池田 満・土屋耕治 (2021) ラボラトリー方式の体験学習における 対面形式とオンライン形式の学習成果の比較 人間関係研究, 20, pp.153-166.
- 津村俊充・星野欣生 (1996) 出会いのころみ *Creative Human Relations vol.II* pp.171-191 プレスタイム 行動科学実践研究会
- 津村俊充・星野欣生 (1996) 価値のランキング *Creative Human Relations vol.VII* pp.83-100 プレスタイム 行動科学実践研究会
- 津村俊充・星野欣生 (1996) POPO *Creative Human Relations vol.III* pp.125-146 プレスタイム 行動科学実践研究会
- 津村俊充 (2010) グループワークトレーニング：ラボラトリー方式の体験学習を用いた人間関係づくり授業実践の試み 教育心理学年報, 49, 171-179.
- 津村俊充 (2019) 改訂新版プロセス・エデュケーション—学びを支援する

Whitney, D. & Trosten-Bloom, A. (2003). *The Power of Appreciative Inquiry: A Practical Guide to Positive Change*. San Francisco, CA: Berrett-Koehler Publishers. (ウィットニー, D・トロステンブルーム, A. 株式会社ヒューマンバリュー(訳)(2006). ポジティブ・チェンジ ―主体性と組織力を高めるAI― ヒューマンバリュー)

参考資料 2021年度の実践概要については、本文中で詳しく触れていないため、以下にまとめ表記する。

表1-5. 2021年度ゼミナールの概要

期	日程	ねらい	実施内容
Q1	①4/6	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミのメンバーと再会する中で、今の自分やメンバーに目を向ける。 ・改めて、このメンバー達とどのような関係を創っていきたいかについて考え、その思いを言語化し、伝える。 	ガイダンス 実習 私の窓
	②4/13	<ul style="list-style-type: none"> ・改めて、この一年のゼミを通して取り組んでおきたいことや、メンバー達とどのような関係を創っていきたいかについて考え、その思いを言語化し、伝える。 ・卒業研究の概要を把握し、自分たちの活動の見通しを立てる。 	実習 この一年のゼミ活動を通して私は… ミニレクチャー 卒業研究について
	③4/20	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の概要を把握し、自分たちの活動の見通しを立てる② ・グループメンバーとのコミュニケーションを通じて、卒業研究のテーマを具体化することに取り組む。 	卒業研究グループ活動①
	④4/27	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の概要を把握し、自分たちの活動の見通しを立てる③ ・グループメンバーとのコミュニケーションを通じて、卒業研究のテーマを具体化することに取り組む② ・ゼミのメンバーと更に知り合う。 	卒業研究グループ活動②
	⑤5/11	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の概要を把握し、自分たちの活動の見通しを立てる④ ・グループメンバーとのコミュニケーションを通じて、卒業研究のテーマを具体化することに取り組む③ ・ゼミのメンバーと更に知り合う。 	卒業研究グループ活動③
	⑥5/18	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の概要を他者へ伝えることを通して、自分たちの活動の内容や方向性を明確化する。 ・プレゼンテーションを通じて、お互いのサポートに取り組む。 	卒業研究ミニプレゼンテーション①
	⑦5/25	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の概要を他者へ伝えることを通して、自分たちの活動の内容や方向性を明確化する ・プレゼンテーションを通じて、お互いのサポートに取り組む 	卒業研究ミニプレゼンテーション②
Q2	①6/8	<ul style="list-style-type: none"> ・Q2のゼミの見通しを持ち、自分たちの活動の見通しを立てる。 ・改めてこのゼミのメンバーと出会い、関わりを通して他者をよりよく理解することにチャレンジする。 	実習 グループ・エンタランス

Q2	②6/15	<ul style="list-style-type: none"> ・大学のある地域を知り、気づきを言語化する。 ・いつものゼミとは違う環境での関わりを通して、メンバーをよりよく理解する。 	実習 いりなか探索
	③6/22	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーと力をあわせ、3年生も含めたゼミメンバーと、よりよく・深く・楽しく知り合うためのアイデアを考え、実行可能性を検討する。 ・改めてこのゼミのメンバーと出会い、関わりを通して他者をよりよく理解することにチャレンジする。 	実習 合同ゼミのプログラムを創る
	④6/29	<ul style="list-style-type: none"> ・他ゼミと共につくる学びの場で、メンバーと力をあわせて、よりより学びを生み出すことにチャレンジする。 ・卒論グループメンバーとの関わりの中で、自分自身の行動目標を意識しながら、課題達成と人間関係形成を共に促進することにチャレンジする。 	実習 Aゼミの試みを共にする
	⑤7/6	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーと力をあわせ、3年生も含めたゼミメンバーと、よりよく・深く・楽しく知り合うためのアイデアを考え、準備を進める。 ・グループ間のコミュニケーションを通して、プログラムの全体像をイメージし、全員で力を合わせて、よりよい場作りにチャレンジする。 ・卒論中間報告会に向けて、グループメンバーとコンテンツとプロセス両方の側面から、自分たちのグループの状況を捉える。 	実習 合同ゼミのプログラムを創る
	⑥7/13	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の概要と進捗状況を他者へ伝えることを通して、自分たちの活動の内容や状態を明確化する ・プレゼンテーションを通じて、メンバー全員がお互いのサポートに取り組む 	卒業研究プレゼンテーション①
	⑦7/20 1コマ目	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の概要と進捗状況を他者へ伝えることを通して、自分たちの活動の内容や状態を明確化する ・プレゼンテーションを通じて、メンバー全員がお互いのサポートに取り組む 	卒業研究ミニプレゼンテーション②
	⑦7/20 2コマ目	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーで力を合わせ、よりよく・深く・楽しく知り合うことにチャレンジする。 ・チャレンジを通して生まれる気づきを捉え、伝え合い、お互いの成長へとつなげる。 	実習 合同ゼミ * 3・4年生合同授業
Q3	①9/21	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーと再会し、お互いの夏休みの体験を知り合う。 ・改めてこのゼミで大切にしていきたいことを理解し、これからの過ごし方やメンバーとの関わりについて考える。 	実習 心の窓
	②9/28	<ul style="list-style-type: none"> ・卒論グループの取り組みを体験し、フィードバックを通して学び合う。 	実習 便利グッズ企画会議
	③10/5	<ul style="list-style-type: none"> ・ラボラトリー方式の体験学習と、学びを支える諸概念について、改めて理解する。 ・チームのメンバーと共に、それぞれが学びの中で大切にすることを知り合う。 	実習 体験学習プログラムを設計しよう！①
	④10/12	<ul style="list-style-type: none"> ・ラボラトリー方式の体験学習のプログラム設計と、ファシリテーションについて理解する。 ・チームのメンバーそれぞれが学びの中で大切にすることと、参加メンバーのニーズを踏まえて、体験学習のプログラム設計を試みる。 	実習 体験学習プログラムを設計しよう！②

Q3	⑤10/19	<ul style="list-style-type: none"> ・ラボラトリー方式の体験学習のプログラム設計と、ファシリテーションについての理解を深める。 ・チームのメンバーそれぞれが学びの中で大切にすることと、参加メンバーのニーズを踏まえて、体験学習のプログラムを設計する。 	実習 体験学習プログラムを設計しよう！③
	⑥10/26	自己開示とFBを通して、自己理解とゼミメンバーへの理解を深める。	担当グループによるプログラム実施① 実習 メンバー愛 確め選手権
	⑥11/9	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な感情に触れ、感情からわかる様々な価値観を理解する。 ・自分の価値観を感情という観点から改めて理解する。 	担当グループによるプログラム実施② 実習 感情ランキング2021 in autumn
Q4	①11/23	今まで出してこなかった自分を新発見しよう	担当グループによるプログラム実施③ 実習 自己開示・自己発見
	②11/30	対話を通して、少数派意見や異論の価値を感じとる。	担当グループによるプログラム実施④ 実習 ほんまでっか
	③12/7	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちの軸を改めて意識し、家庭や社会の中での実現を試みる。 ・人間が持っている『危機に対する認知特性』を知る。 ・いつどこで起きるのかわからない災害から自分と自分の大切な人の命を守るために、備えの可能性と、実際の行動を考える。 	実習 自分と自分の大切な人の命を守るために①
	④12/14	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちの軸を改めて意識し、家庭や社会の中での実現を試みる。 ・いつどこで起きるのかわからない災害から自分と自分の大切な人の命を守るために、備えの可能性と、『危機に対する認知特性』を踏まえた行動計画を考える。 	実習 自分と自分の大切な人の命を守るために②
	⑤12/21 2コマ連続	<ul style="list-style-type: none"> ・このゼミのメンバーと、より深く知り合う。 ・卒論活動の様子を伝え、知り、イメージを広げる。 ・関わりを通して生まれる気づきを捉え、伝え合い、お互いの成長へとつなげる。 	実習 朝刊に間に合わせろ 実習 好きなものルーレット 実習 卒業研究Q & A & 愚痴大会 * 3・4年生合同授業
	⑥1/11	<ul style="list-style-type: none"> ・約2年前に出会ったメンバーとの関わりを通して、お互いの理解を更に深める。 ・フィードバックを通して、自分らしさや強みについて目を向け、今度への活かし方を考える。 	実習 四面鏡
	⑦1/18	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでのゼミを通じた体験をふりかえり、気づきを言語化する。 ・お互いの気づきや思いをわかちあい、味わう。 	実習 四面鏡(つづき) 全体シェア

Q4	⑧1/25	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちにとっての卒業研究の意味を明確化し、他者へ伝える ・各グループのここまでのプロセスを受け止め、FBを通してお互いを讃える。 	卒業研究最終報告会
----	-------	---	-----------

表1-5. 注) 2021年度のゼミは、全て対面の形態で実施された。